

超ゆてい教育

尽くしたし!

×
-マラバコ店長! part2 -
尽くされたし! ♥


基本CG

26枚!

+差分多数!

W ■ R KING! の 杏子さへ&N 代さへおっぱいCG集!

前回までのあらすじ。



俺の名は※※。北海道某市にあるファミリーレストラン「ワグナリア」でコックとして働く俺は、スタッフが問題児だらけのこの職場で毎日振り回されながら忙しく過ごしていた。

そんな中、問題児の中の問題児、働かず食べてばかりの白藤杏子店長とひよんな事から肉体関係をもってしまう。



当初はあくまで互いの欲求を満たすためだけの関係だったはずが、身体を重ねていくうちに俺は店長、杏子さんという女性そのものに惹かれるようになっていった。また、それは杏子さんも同じだったようだ。

ある日、とうとう俺は杏子さんに自分の気持ちを告白した。すると……



杏子「…ふっ、お前も変わり者だな。自分でいうのもなんだが、私と一緒にいると色々大変だぞ？
あとで後悔する事になっても構わないのか？」

※「後悔なんて…、杏子さんの初めてをもらった時にもう済ませてますよ。今あるのは、この杏子さんへの
気持ちと覚悟だけですから」

杏子「…そうか、やっぱりお前は変なヤツだ」



杏子「んふっ、んんうっっっ♡♡ああっっっ♡♡もっ、もっ♡もっ激しく…っっ♡♡抱いで…っ♡
んああああっっ♡♡♡」

※「はあっ、はあっ、はあっ！！杏子さんっ、杏子さん…っっ！！大好きです…っっ！！」

※「.....、あれからもう、半年か」



?「あらっ、どうしたの※※君。ほーっとしちやって♪ちゃんとお仕事しなくっちゃ駄目よ？」



※「あっ、悪い悪い。ちょっと考え事してたからさ。それにほら、お客さんも今はいないし」

八千代「うふふっ、別に謝らなくていいのよ♪※※君はいつも一生懸命お仕事してくれるんだもの♪」



この人は俺と同僚の、フロアチーフを担当している轟八千代さん。俺がこの店に入るずっと前から勤めている先輩だ。事情によりしばらく店を休んでいたが、現在は職場復帰し働いている。

美人で気が利いて仕事も出来る、この店になくではならない存在だ。だけど…



…腰から物騒なモノ(模造品では無く、本物らしい)をぶら下げている。やっぱり彼女も変わり者のようだ。

八千代「どうしたの、※※君。あつ、ひょっとして※※君も刀に興味あるとか？」

※「いや、別にそんな事は」



※「それにしてもお客さん来ないな…これじゃあ開店休業状態だよ。ははっ」

八千代「この時間帯はどうしてもね〜。お掃除とか雑用のお仕事もほとんど済ませちゃったし」



八千代「あっ、それなら…っ♥※※君、私そろそろ休憩に入るんだけど…※※君も一緒にどう？」

※「んっ、そうだな…。俺は少し早いけど、今なら大丈夫かな」

八千代「うんっ、それじゃあ先に行ってるわねっ♥うふふっ♥」



ほぷら「あっ、※※さん。八千代さんと何話していたの？ ※※さん、最近ずっと八千代さんと仲いいよね〜っ♪」

※「んっ？ あ〜っ、そうだね…大人の話、かな？」



ほぷら「おっ、大人…！ かつこいいっ！！ 私もそんな話ができる女性になりたいっ！！」

大人、か。ほぷらちゃんには絶対見せられないな。なにせ俺と八千代さんは今…。

休憩室

八千代「わあ、凄い…っ♡こうなると※※君が凄く辛いって、杏子さんが言ってたし♡早く処理
してあげなくっちゃね…っ♡」

※「うわ、うわ…っわ！！」



八千代「うふふっ、大丈夫っ♥もうしっかりコツは掴んでるから…っ♥中に溜まったHなお汁、
いっぱい出して※※君のオチンチシ、楽しんであげなくっちゃね…っ♥」

俺の、既にガチガチにポッキした肉棒を見て、嬉しそうに言う八千代さん。



八千代「んんむ…っ、むちゅっ♥ちゅばっ、ちゅぶ…っ♥」

いきり立った肉棒をひよいとつまむと、先っぽからゆっくりと飲み込んでいく八千代さん。

※「うはあ…っっ!! きっ、気持ちいい…っ、八千代さんの柔らかい唇が…っ、
くら…っっ」



※「うああ…っっ！やっ、八千代さん…っ、すっ、すっかり上手く…なりましたね…っ！」

八千代「んふっ♡んちゅっ、ちゅばっ、ちゅるるんっ♡♡」



八千代「ちゅばっ、ちゅっ、ちゅっ、んくっ♥ちゅるるっ、ちゅばっ♥ちゅちゅちゅっ♥♥」

※「はぁっ、はぁっ、うぐっ！うああ…っ！！そんなにされると…っ、もっ、もう
射精る…っ！！イキますよっ、八千代さんっ！！」

八千代「うんっ、んんっ♥♥ちゅばばっ♥♥」



びゅびゅるっ!!どっどっ!!びゅるるるっ!!
ついに俺は八千代さんの口の中で精液をぶちまける。解き放たれた白濁液が次々と
口の中へ注ぎ込まれていく。

八千代「わっわわわわわー♡♡♡♡♡」



八千代「もご……っ、んぐ……っ♡んん……っ♡」

※「はぁ……っ、はぁ……っ、はぁ……っ」

ようやく射精衝動が収まり、肉棒の動きが止まる。八千代さんの顔や口の中は俺の汚い精液でベトベトた。



八千代「…んぐっ、んん…っ♡♡ぐちゅちゅ…っ、んっ♡ごく…っ、ごっくん…っ♡♡」

肉棒から口を離すと、口の中いっぱい溜まった精液をぐちゅぐちゅと音を立てて咀嚼し、喉を鳴らして飲み込んでいく。

※「はあ…っ、はあ…っ、八千代…さんっ！」

※「はぁっ、はぁっ、八千代さんっ！続きしてもいいですかっ！いいですよねっ！」

八千代「きゃっっ♡いっ、一回だけじゃ収まらないってホントなのね…っ♡んあぁっ、そんないきなり…っっ♡♡」



伊波「あれっ、八千代さんは？ ※※さんもキッチンにいないみたいだけど…」

ほぶら「ああ、伊波ちゃん。八千代さんと※※さんは今、休憩中だよ。なんでも大人の話するんだって」

伊波「大人の話…、いいなあ…私も八千代さんみたいな立派な大人になりたいなあ…」

八千代「んああっ♡♡そんな、乱暴におっぱい掴んじや…っ、んんあっ♡♡」

※「はっ、はっ、はっ！！」

俺は貪るように八千代さんの身体にしがみつき、無我夢中で必死に腰を振っていた。



八千代「杏子さんの代わり…っ♡♡頑張って、※※君をお世話っ、しっ、しなくっちゃ♡
んあっっ♡あっっ♡♡♡」

※「(八千代さん…っ！おっ、俺は…くそ！！)」



あれから半年後、俺は杏子さん以外の女性を己の欲望のままに抱いていた。

尽くしたい!x尽くされたい♡
ハラペコ店長!part2



それは今から一ヶ月ほど前の事。事故のケガにより、しばらく入院していた八千代さんが
職場復帰することになった時からだ。

俺は杏子さんから八千代さんの事は少し話には聞いていたのだが…。



ハ千代

ハ千代「杏子さんっ、杏子さんっ♡♡うふふっ、今日は何が食べたいですかっ？」

杏子「うーん、そうだな…じゃパワエで」

ハ千代「はあ——いっ♡♡杏子さんのお世話っ、お世話～っ♡♡」



※「…えっ、ちょ……………」

なんか全然話聞いてたのと違うんですけどお！！？なんなんですかこの人はっ！！？



杏子「ん、どうした※※。ほーっとしてないで、ちゃんと動けよー」

八千代「あぁ、杏子さんカッコイイっ♡♡」

休憩室



※「杏子さん！なんなんですかあの人！聞いてた話と全然違う！真面目でよく働く人って聞いてたのに！」

杏子「何をそんなに怒っているんだ、八千代はしっかりしてるぞ。私と違って仕事も出来るし」

※「店の食材を勝手に持ち出して杏子さんにパフェ作ってるし、あとなんで刃なんか持ち歩いてるんです」



※「そっ、それに…杏子さんにベタベタくっついて…。おかげで俺と杏子さんが一緒にいられる時間がほとんど…」

杏子「んー、八千代は昔いじめられてたところを私が助けてから、妙に懐かれてしまっとなー。以来ずーっと、あんな感じた。なんでそうなったのか、私にもよくわからんがな」

※「とっ、とにかく…っ！俺と杏子さんの事も少しは考えて欲しいんですっ！」



杏子「うーん、まあ話はなんとなくわかった。八千代が来る前のようにすればいいんだな？八千代には私からちゃんと説明しておく。あいつだってもう立派な大人だ。心配はいらん」

※「まっ、まあ…そういう事です(大丈夫かなあ…杏子さんの事だからちよっと心配なんだが)」


そして、俺のその不安は見事的中する。

次の日



八千代「※※君っ、杏子さんから話は聞いたわっ！私、頑張って杏子さんの代わりにあなたのお世話するからっ！よろしくねっ！」

※「はあ~~~~っ！！??」



※「えと、八千代さんっ！？お世話ってどういう…」

八千代「杏子さんがね、※※君とはえと…ヤトカリがどーのこーので…とっ、とにかく※※君のために
頑張らないと、杏子さんが困るって！だから私やるわっ！」

弱ったぞ…杏子さんに任せたら話が余計にややこしくなってきた。かといって八千代さんに俺と杏子さんの
関係をバラしたら、俺が八千代さんに刃で殺されるかもしれない…。

休憩室



※「杏子さんっ！轟さんにどんな説明したんですか！おかげで話が余計にややこしく…って、あれ？おかしいな。どこへいったんだ」

ほぶら「あれっ、※※さん。どうしたの？杏子さんならもう出かけてったよ。話、聞いてなかったの？」

※「えっ？」



ほぶら「ほらっ、※※さんと杏子さんが少し前に会社のパーティーにいったじゃない。あれで杏子さんが引いたくじ引きが当たったらしくて、それで…」

※「りよっ、旅行！！？どこにっ！？いつ帰ってくるの！！？」

ほぶら「えーっと、確か『世界一周世界料理食べ放題ツアー』だっけ。帰ってくるのは3か月後って。まさか全然聞いてなかったんじゃ…』



※「ぐぬっ、ぬぬぬう……っ！！杏子さんのアホ……………っ！！！！」

それからというもの、俺と八千代さんの奇妙な関係が否応なしに始まってしまった。杏子さんに毎日尽くす日々が、八千代さんに毎日尽くされる日々になってしまったのだ。



※「ふう〜っ、疲れる〜っ」

八千代「※※君っ、疲れたの？肩揉みしてあげようっか？あっ、イス持ってくるわっ♪座れば楽に〜っ」

※「わ〜っ、なんでもないですよ〜っ！」



※「まかない何にするかなー、うーん考えるの面倒だ〜っ」

八千代「それじゃあ今日は私が代わりに作るうっか？あっ、でも料理はしたことないから…バフエなんて
どうかしらっ♪」

※「いいからいいからっ！そんなもん出したら俺が皆に怒られるっ！」

と、こんな感じで八千代さんに四六時中くっつかれるハメになってしまった。だが、別に本人に悪気があるわけではなく、山田のようにウザいわけでもない。正直なところ、八千代さんくらいの美人に尽くしてもらえる事はまんざらでもなかった。

しかし、俺にはもう杏子さんという心に決めた人がいる。その事が、どうしてもモヤモヤを生んでしまっていたのだ。そして八千代さんはさらに驚くべき行動にでる。それは…



※「ですから、無理ですって！いくらなんでもさすがに轟さんには、そんな事させられませんっ！」

八千代「どうしてっ！私、杏子さんに任されたから。杏子さんに出来るなら私にだって！」

休憩室で八千代さんと言い合いになった。無理もない、八千代さんが俺にやるうとしている事は…。



※「轟さんは、意味が本当にわかってるんですか？俺とセックスするって言ってるんですよ！」

八千代「そのセッ…なんとかはよくわからないけど、私頑張るからっ！出来るからっ！だから教えてちょうだいっ！
※※君っ、私杏子さんの言いつけは絶対に守りたいのっ！」

※「ああ～～、もう杏子さんといい、なんでこう当たり前の知識がすっほ抜けてるんだ…っ！」



こうなりや、もうヤケだ。本人がいいって言うてるんだから、付き合っただろうじゃないか。どうせ、すぐに根を上げるに決まっているさ。

※「わかりましたよ…。それじゃあ、準備しますから待っててくださいね」

八千代「はあっ♡わかってくれてありがとう※※君。私、精一杯頑張るわねっ♡」

八千代「えと…っ、あの…これ…っ！！」

※「どうしたんです、さあ早くしてください。轟さん。杏子さんみたいに出来るんでしょう？」

八千代「あ…っ、く……っ。うっ、うん……っ」



八千代「うあ……っ、あぁ、熱い……っ！ そっ、それに……っ、びっ、ビクビクって動いてる
うっ、うっ……っ！」

震える手つきで恐る恐る俺の肉棒を掴む八千代さん。このリアクション、間違いなく
男性器を見るのも触るのも初めてだろ。

八千代「おっ、男の人の……っ、おっ、ちんちんって…、こんなに大きいものなの……っ！？」



※「今更そんな事で驚いてどうするんですか…羅さん。杏子さんの代わりに俺を慰めてくれるんでしょ？さあ…、早く扱ってください」

八千代「…、扱…って、あの…どうすれば…」

※「手で強く握って、上下に擦るんですよ。ほら、早く…」



八千代「そっ、それじゃあ…んっ、とっ、こんな感じで…いいのかしら」

※「駄目ですね、もっと強く…指に力入れてしっかり扱ってくださいよ」

八千代「カ入れて…っ、しっかり扱っ…っ、うっ、うん…わかったわ」



ぬちゅっ、くちゅっ、にゅちゅっ。
おぼつかない、拙い手つきながらも、八千代さんは真面目に俺の肉棒を扱く。その細くて綺麗な指が、肉棒をぎゅっつと握り、摩擦して刺激する。

※「ん……っ、少し良くなってきました…よっ。轟さん…、その調子でお願いします…」

八千代「それでいいのね…っ、じやあもっつと続けるから…っ」



八千代「うあぁ、ああ…っ！扱く度にも、オチンチンがビクビクって動いて…っ、まっ、まるで…っ、むっ、虫めたいに…っ、うっ…っ！」

※「気持ち悪かったら、別にやめても…っ、くっ…！いいですよ…っ！」

八千代「だっ、大丈夫…っ！私っ、続けられるから…っ！」



※「ああ…っ、もうイキます…っ！ 轟さんっ、射精ますよ…っ！！」

びゅるうっっ！！びゅびゅっ！！びゅくっ！！
俺はたまたま、八千代さんの手に導かれるままに射精した。勢いよく宙に舞い上がる精液。

八千代「きゃっっ！！えっ、何か出たわっ、なにこれっ！？おっ、おしっこ…っ！！？」



八千代「うああ……っ、バトバトしてで…、それに凄い臭い……っ」

※「はあ…、はあ…、思わず射精してしまった…。それが精液ですよ、轟さん。男が気持ちよくなると、そっやって射精するんです」

八千代「せっ、せいえき…？しやせい……？？よっ、よくわからないけど…、※※君は気持ちよかつたっで事なのよね…？」

八千代「ちよっ、え…っっ、やあっっ！！はっ、恥ずかしい…っ、みっ、見ないでえ…っっ！！」

※「俺のをしっかり見ておいて、それはないでしょ…。さあ、見せてもらいますよ。轟さんの
恥ずかしいところを全部っ！」

八千代「んあああああ————つっつっつ！！！！！！」

ぶちぶちぶちいっ！！

八千代さんの20年間大事に守ってきた貞操は、あっけなく俺に破られた。極太の肉棒がまた誰の侵入も許していない膣肉をぐにぐにと突き分け、一番奥の子宮口にまで突き進む。

※「んおあ……っ！！しっ、締まる……っ！！！！」





八千代「痛い……っ、痛いわ……っ、※※君……っっ！」

※「だからっ、俺は何度も何度も…忠告したはずですよ…っ。もう今更後戻りなんて、出来ないですからね…っ。早めに終わらせますから…っ、我慢してください…っ！」

痛がる八千代さんに俺はそういつと、彼女の両足をがっちり掴み、ピストンに備えて姿勢を整えた。

※「声出しても、この屋根裏部屋なら、誰にも聞こえませんからね…っ！いきますよっ！」

ぶちゅっ！ぶちゅっ！ぶちゅんっ！！
全体重を乗せた本気ビストン。処女を失ったばかりの八千代さんにはあまりにきつすぎる
洗礼だ。

八千代「っっっっ————！！！！痛い、痛い——っ！！！！」

※「はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ！！」



八千代「痛いっ、んんううっ、痛いいいっ！！おっ、お願いっ、※※君っ、止まっ、止まってええっ！！！！」

あまりの痛みに身を仰け反らせ、中断するよう懇願する八千代さん。でも、一度セックスを始めた男が止められるわけがない。

※「我慢して…っ、ください…っ！すぐ…っ、終わりますから…っ！！」

あっ！

あっ！

アッ！

アッ！

アッ！

彼女の無知が原因とはいえ、俺も心が痛まないわけではない。だが、八千代さんのような美人の女性の、しかも初めての相手をしているという現実には、俺はすっかり興奮していた。

八千代「んぎっ、んんっうっ！！あっっ、痛いっ、痛いいっ！！！！」

※「はあっ、はあっ、気持ちいいっっ！！うう……っ、轟さんの処女マンコっっ、最高だっ！！」



※「そろそろイキますよーっ、母さんのオマンコにっ、膣内射精しますよっ！俺のっ、精液っ、
いっぱいぶちまけますからねっ！」

八千代「んぐっ、んううっっ！！ああっっ！！！！」

痛みに耐えるのが精一杯でもはや俺の声など聞こえてないようだ。俺は射精の瞬間に
向けてさらにピストンを加速させた。



※「ああ…っ、イクっ！！射精るっ！！うおおっ！！やっ、八千代おおっ！！！！」

八千代「っっっっっっ」

どくんっ！！びゅびゅううっ！！
一番奥まで体重を乗せて肉棒をねじ込むと、中ではじけるように精液を放出した。



八千代「んぐ…っ、うああ……っ、はぁ……っ、はぁ……っ」

地獄のような痛みからようやく解放され、呆然とした表情のままの八千代さん。結合部からは破瓜の血と愛液と俺の精液がぐちよぐちよに混ざって垂れ落ちていた。

※「はぁ…っ、はぁ…っ、終わり…、ましたよ……轟さん…」

はぁっ!

はぁっ!

はぁっ!



勢いもあったとはいえ、とうとう俺は…八千代さんの初めてを奪ってしまった。彼女の同意もあったとはいえ、本当にこれで良かったのか。

でも、一つだけ幸いなのはもう八千代さんは俺に付きまとうことはもうない、という事だろう。あの痛みがようやく、きっと幻滅して、もう俺に近寄る事もない…はずだ。

その後



八千代「ふっふ〜んっ♥今日もお仕事、※※君のおっ世話〜っ♥どっちも頑張らなくっちゃね〜っ♥
杏子さんが帰ってくるまでっ♥」

※「あっ、あの…轟さん。そんなにくっつかなくてもいいから」



どうやら逆に轟さんに懐かれてしまったようだ。なぜだ、あんなひどい事をしてしまったのに。いったいアレのどこに彼女が俺に懐く要素があったっていうんだ。

※「轟さん、もしかして俺を責めているんでしょうか。この前の事なら…」

八千代「あのっ、※※君。私の事は苗字じゃなくてちゃんと「八千代」って呼んで欲しいなっ♡前みたいに♡」



※「えっ??」

八千代「ほらっ、あの時私の事八千代って呼んでくれたでしょ。それも何回も♡私、同じ年の男の人に名前呼んでもらえたの初めてで…っ。その…っ、嬉しくて…っ♡さやっ♡」

※「いや、とど…八千代さん。そんな事よりもっと重要な事があったでしょ？その…えっと…セックスした事…」



八千代「そうっ、その事もなんだけど！私っ、次からはもっと上手く出来るように頑張るからっ！
杏子さん言ってたの『最初は痛いぞ』って。それで私、急に凄く怖くなって…、ごめんなさい」

どうやら八千代さんは今まで杏子さんについてきたために、彼女と同じくセックスという事を根本的に理解して
いなかったようだ。

※「う〜ん、杏子さんとは違うけど…、八千代さんもどうやら俺がついててやらなきゃいかん気がしてきた」



※「八千代さん、これからよろしくお願いします。俺に出来る事なら、なんでも協力しますから(このままじゃ杏子さんと同じ駄目な人になってしまうかもしれない。俺がしっかりついて、矯正してあげなれば)」

八千代「あっ、ありがとう！私っ、頑張るねっ！（ああ…っ、初めて男の人とお友達になれた…っ♡）」

その後



※「あれからもう2ヶ月、杏子さんが帰ってくるのは…来月か」

八千代「※※君っ、お待たせ♥」

仕事が終わりと、休憩室で待っていると着替えを済ませた八千代さんが入ってきた。こんな風に彼女と一緒に帰る事も当たり前になりつつあった。



※「よしっ、それじゃあ行きますか、八千代さん」

八千代「うんっ、※※君。それじゃあ今日もよろしくねっ♡」

俺と腕を組んで、嬉しそうに寄り添う八千代さん。これじゃあまるでカップルみたいだ。

※「あの…八千代さん。その…」



八千代「んっ？なほに、※※君っ♡」

※「いや、なんでも…ないです」

心の中で相変わらず葛藤を感じつつも、実際のところ俺自身、八千代さんの暖かさにどんどん惹かれつつあった。杏子さんとは何もかも正反対な彼女の魅力に、気付いてしまったのだ。

八千代「おっ、お邪魔します〜っ」

※「うん、まあ狭くて何も無いところだけど、良かったら入ってよ」



八千代「わあ〜っ、綺麗っ♪私っ、男の人の部屋に入るのも初めてなの。でも、ちゃんと片付けられてて…」

※「意外だったかい？それでもまあ、掃除はママな方なんだ。まあ、八千代さんのイメージ通り、掃除しない男は多いけどね。まあ、座ってよ」

八千代「こっ、ごめんなさい私そんなつもりじゃ…、うんっ、ありがとう※※君」



今日は、八千代さんが俺の私生活を見たいといふので、家に招待した。この部屋に女性を招待するのも、杏子さん以外では初めてだ。

八千代「うふふっ、それでね※※君。私が初めて仕事をした時、杏子さんが私の担当を決めてくれて、その姿がまたカッコ良くて…」

※「……(八千代さんの杏子さん話は相変わらずだな…。八千代さんも杏子さんが大好きって事か)」



※「さて…と。そろそろ夕食の時間だな。何か作るよ。リクエストがあれば、聞くけど？」

八千代「えっ、えと…私…。なんでもいいわ、※※君の好きなもので…」

※「んー、それじゃ適当に今ある食材でいくつか作るうっかな。じゃあ少し待っててね」

八千代「あっ、私も手伝うわっ」



※「さて、まずスープからっと…」

八千代「※※君の家の冷蔵庫、すいぶん大きいのね。まるでお店の冷蔵庫みたい」

※「ああ、それね。杏子さんがよく食べるから業務用のを購入したんだよ。家庭用じゃ一日と持たないからね」



八千代「杏子さん…しよちゆうここに来たのね。……………」

俺の部屋に、杏子と居た証を見つけた事にショックを受けたのが、黙り込む八千代さん。

※「その…、八千代さんが戻ってくるまでは俺がお世話してたからさ、ねっ」



八千代「よっ、よく…わかんないんだけど…、きよっ、杏子さんと※※君が仲良くしてるところを想像したら…、
なんだかモヤモヤしてきた…」

※「八千代さん…、それは……」

八千代「こっ、ごめんなさい!! 変な事言って…そうよね。※※君が私の代わりに杏子さんのお世話をしてくれてた
だけなものね…っ」

八千代「えっ、きやあっ！ ※※君…っ！？」

俺は無言で八千代さんを後ろから抱きつき、調理台の上に押し倒した。自分でもなんだかわからないが、俺は今無性に彼女を抱きたくなったのだ。

※「八千代さん、今ここでしますよ…いいですね」

八千代「んああっ♡あっ、あっ、あっ♡♡いきなりっ、はっ、激しいわっ、※※君っ♡♡
そんながむしやらに…っっ、んんうっっ♡♡」

※「すみません…っ、とにかく八千代さんとやりたくなっただけです…っ！！」





ワンピースをはだけさせ、豊満な乳房を手でまさぐり、ひたすら腰を打ちつける。まるで発情期の猿のような、野生的な交尾だ。

八千代「あっ、あっ、あっ♡♡んんうう♡こっ、こんなところで…っ♡♡んああっ♡」

※「はあっ、はあっ、可愛いですっ、八千代さん…っ！」

八千代「かつ、可愛い…っ♡んくっ♡うっ、嬉しい…っ♡※※君に私…っ、んんああっ♡♡
わっ、私も…っ、その…っ、んああああっ♡♡♡」

続きを言わせまいといわんばかりにさらに腰を杏子さんのお尻に叩きつける。

八千代「んひっ♡♡オチンチンっ、気持ちいいっ♡♡んあっ、ああっ♡♡」



ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！
キッチンに響き渡る、肉と肉がぶつかりあう音。それがますます大きく、そして早くなっていく。

※「はあっ、はあっ、くっ！！射精ますよっ、八千代さんっ！！膈内につ！あったけっ！
精液ぶち込みますよっ！！」

八千代「きてっ、きてええっ♡♡わっ、私も…っつ、んあっっ！！イクイクっ！イっちゃうっっ！！」



射精がようやく止まると、俺は後ろからのしかかるように八千代さんに抱きついた。しっとり汗ばんだ、その柔らかくて暖かい身体をぎゅっと抱きしめる。

※「はあ……っ、はあ……っ、すみません…でした…っ、八千代さん……っ」

八千代「ううん…っ、いいのよ…っ、※※君…っ♡私も…っ、気持ちよかったから…っ♡♡」



食事が済むと、今度は二人でお風呂に入る事になった。さっき運動したせいでお互いたっぷりと汗をかいてしまったからだ。

八千代「も〜っ、今更前隠さなくたっていいわよ、※※君♥」

※「しっ、しかし…、ああっ！」



※「ぞくり……っ」

間近で見る八千代さんの裸。こうやって改めて見ても杏子さんに負けないくらいの抜群のスタイルだ。キョツと締まった腰のくびれ、すらりと伸びた長い手足、たっぷりとあるおっきなおっぱい……。



八千代「うわっ、どかしたの、※※君？私の身体、どこか変かしら」

※「いや、逆です…。凄く…凄く綺麗だなって。思わず見とれてしまいました」



八千代「はあっ♡♡ありがとっ、※※君。そういつてくれたのも、※※君が初めてよっ♡」

八千代さんはそういつて嬉しそうにはにかんだ。

八千代「それじゃあ私っ、※※君の身体、洗ってあげるわねっ♡」

※「えっ、いいですよ！おっ、俺自分の身体くらい洗えますから…」

八千代「いいのいいのっ、※※君は私がお世話するって決めてるんだから…っ♡」

八千代「さてと…、あらあらっ？どうしておちんちんが固くなってるのかしら…♡
困ったわね…っ、これじゃあ上手く体が洗えないわ…どうすればいいのかしら…♡」

いたずらっぽい口調で、八千代さんが言う。

※「うっ、そ…っ、その…っ。出来れば…あの…っ」



八千代「なおに？ ※※君、早くしないといつまで経っても洗い終わらないわよっ♡」

俺の口からどうしても言わせたいみたいだ。少し前まで、セックスの事さえ知らなかった八千代さんがすっかり俺を手玉に取ってしまった。

※「くっ、口で…お願いします。しゃぶってください」

八千代「うふふっ、しょうがないわね…っ♡♡」



八千代「それじゃ…いただきまあふ……っ、んんっ♡ちゅぽっ♡」

そういと八千代さんは嬉しそうに大きく口を開けて、勃起した肉棒にしゃぶりついた。

八千代「んちゅっ、んんっ♡ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ♡ごくっ♡んんっ♡」

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ



八千代「ふとふて…っ、おいひい……っ♡♡ぢゅばっ、ぢゅぢゅっ、んんっ♡♡」

※「うおああっ！やべ…っ、八千代さんっ、ホント上手くなりましたね…っ！」



八千代「ぢゅぱっ、ぢゅっ、ぢゅるるっ♡ぢゅぽっ、んんっ、ぢゅぢゅっ♡♡」

いやらしい音を立てて、肉棒をしゃぶる八千代さん。彼女が動くたびに、その豊満な胸がぶるんぶるんと柔らかそうに揺れる。

ぢゅぱっ

ぢゅっ

※「あっ！！やばいっ！！もっ、もう射精る…っ！！うう…っ！！」

どくんっ！！びゅびゅっ、びゆるるるうっ！！
思わず八千代さんの口の中に精液を発射する。びくびくっと震わせながら、次々と精液を送り込んでいく。

八千代「んんぶうっっっ♡♡♡♡んんっ、んぐ……っ♡♡♡」



八千代「んん……っ、ぐちゅ……っ、ぐちゅ……っ、ごっくん……っ♡♡」

口いっぱい溜まった精液をぐちゅぐちゅと口の中でかき混ぜ、喉を鳴らして飲み込んでいく八千代さん。

八千代「んっ♡んん……っ、ごっく……♡♡」

ぐちゅぐちゅ♡



んん……♡

八千代「あらあ…？あんなに射精したのに、まだまだ固いわねえ…♡うふふっ、だったら
こういうのはどうかしら…っ♡♡※※君、確か好きなのよね…っ♡」

※「えっ、八千代さ…っ、うわあっ！！」

八千代「んしょっ、んしょっ♡どうかしら…っ、初めて挑戦してみたんだけど…っ♡ちゃんと出来てる…っ？♡♡」

にゅぶっ♡にゅぶっ♡にゅぶっ♡

そうって八千代さんは俺の肉棒を、そのおっきなおっぱいで挟み、扱く。まさか…彼女がバイズリを知っていたなんて！

※「うおおっ！！すっ、すげえ気持ちいいです…っ！まっ、まさか八千代さんが…っ！」





八千代「うふふっ、これも杏子さんから教えてもらったの♡『胸で挟んでやるとバカみたいに喜ぶ』って♡最初はなんのことがよくわからなかったんだけど…」

※「きよっ、杏子さんめ…っ、なんて事を教え…っ、うおお！！」

豊満な柔肉にサンドイッチされ、リズムカルに扱かれる快感。こんなの絶対気持ちいいに決まっている。

八千代「ああ…凄いつ♡おちんちんがまた熱くなってる…っ♡私のおっぱいの中でっ、
※※君のが動いて…っ♡♡」

※「はあ…っ、はあ…っ、うく…っ！！うう…っ！これじゃあ立場逆転だっ！」



※「やばい…っ、まだ始まったばかりなのに…っ！気持ちよすぎて…っ、もう射精る…っ！！
八千代さん…っ！イキますよ…っ！！」

八千代「いいわっ、いつでも射精して…っ♡♡※※君の気持ちいい証っ、いっぱい射精して
ちょうだい♡♡」



どびゅっ！！びゅびゅっ！！びゅるるるうっ！！
八千代が根元から押し出すように肉棒をおっぱいで扱った瞬間、栓が抜けたように一気に
精液が放出され、宙に舞った。

八千代「きゅっっっ♡♡♡射精たわっ、いっぱい♡♡※※君のおチンチン汁♡♡」



※「はぁ…っ、はぁ…っ、ぐ…っ！！ぶはぁ…っ！！きっ、気持ちよかったぁ…っ！！」

八千代「はぁ…っっ♡ネバネバのオチンチン汁でいっぱい…っ♡こんなに射精してくれるなんてよっほど気持ちよかったのね…っ♡嬉しいわぁ…♡」

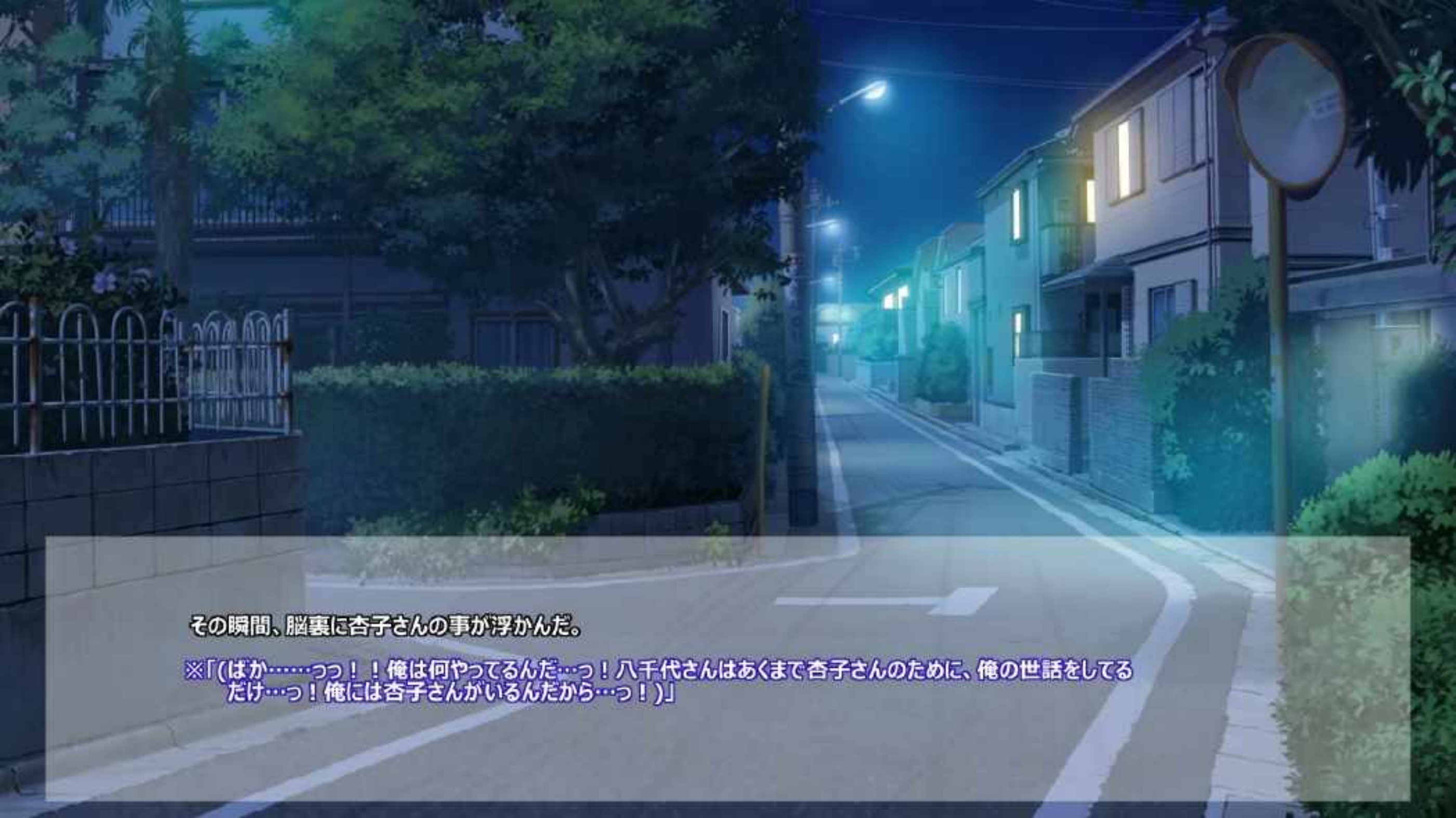




八千代「家の近くまで送ってくれてありがとう。今日も楽しかったわ♥また明日ね、※※君♥」

※「あっ、ああ…また明日…。八千代さん。……あのっ」

にこっと優しく笑い、帰っていく八千代さん。そんな彼女をふいに後ろから抱き締めたくなり、思わず身体が動きそうになる。



その瞬間、脳裏に杏子さんの事が浮かんだ。

※「(ばか……っ！！俺は何やってるんだ…っ！八千代さんはあくまで杏子さんのために、俺の世話をしてるだけ…っ！俺には杏子さんがいるんだから…っ！)」

その夜

俺はその夜、久しぶりに見た夢の中で杏子さんの事を思い出していた…。



※「変なヤツ...ですか？俺」

杏子「ああ、十分すぎるくらい変なヤツだ。なぜか私の周りにはそんなヤツばかりだがな。
だから、私がついてやる。これも上司の役目だ」

※「...そうですか、じゃあ俺はずっと杏子さんの部下として働きますね」



そういつと、杏子さんは俺の目の前でしゅるしゅると制服を脱いでいき、全裸になった。
何度見ても思わず生唾を飲み込むくらい、美しく、艶かしい身体。

※「どくりっっ！杏子さん……」

杏子「………、そんなにマジマジと見るな……」



※「あれ、もしかして今更照れてるとか？杏子さん、そんな可愛いところもあったんですね」

杏子「そんなとはなんだ…。まあいい、お前のナニもすっかり準備万全みたいだしな…。
今夜は好きなだけ付き合っでやる…」



杏子「ん…っ、ふ…っ、ん…っ！相変わらず元気だな…っ、お前のは。どうだ…っ、気持ちいいか…っ？」

※「もちろん…っ、言うまでもなく…っ、ですよ…っ！」



にゅぷっ！にゅぽっ！にゅぷんっ！
余裕のKカップ超えサイズおっぱいが、俺の肉棒をがっちり挟み込み、抜く。
その圧迫感、摩擦力はまさに圧倒的、杏子さんにしか出来ない特権だ。

※「このおっぱいのためなら…っ、俺はいくらだって…っ、杏子さんのご飯作れますよ…っ！うう…っ！」



杏子「そうか…っ、じゃあ私もお前のためにいくらでもしてやるう…っ。好きなだけ挟んで扱いてやる…っ♥」

※「ええ…っ、そうさせて…っ、もらいますとも…っ！」

杏子「ふっっ、んん…っ、ふ…っ！」



杏子「ふふっ、チンポがびくびくしてきたぞ…っ、そろそろ限界だろう？ いつでも…っ、好きな時に射精していいぞ…っ、ほらっ、イけ…っ♡」

※「くっ、ああ…っ！ もうちょっと…っ！ このままでいたい…けどっ！ もう無理っ！ 射精しますよ…っ、杏子さんっ！」



びゅるるうっ！！びゅびゅっ！！びゅくっ！！
火山が噴火するみたいに、先端から一気に精液が飛び出し、宙に舞う。

杏子「っっっ……♡♡♡ふふっ、凄い勢いだぞ…っ♡♡」

※「うおお…っ、く……っ！！はあっ、はあ…っ、きよ…っ、杏子…さんっ！」

ねちやあ…っ。
杏子さんが挟んでいたおっぱいをゆっくりと広げる。ねっとりおっぱいにへばりついた
精液が、納豆みたいに糸を引いて垂れ落ちた。

※「はあ…っ、はあ…っ、はあ～～…っ」

杏子「中まですっかりべとべとだな…っ♡相変わらず凄い射精量だ…っ♡すっかり
お前の臭いがこびりついてしまったぞ…っ♡」

はあ…っ
はあ…っ
はあ…っ

ねちやあ…っ♡

はあ…っ♡
はあ…っ♡
はあ…っ♡

杏子「んああああ……っっ♡♡♡やっ、んううっ♡あっ、あっ、あっ♡♡♡」

※「杏子さん…っ、杏子さん…っ！！」



ずちゅっ！ずはゅっ！ずぶらっ！
杏子さんの腰を掴み、無我夢中で突き上げる。杏子さんもまた離すまいといわんばかりに、ぎゅっと俺にしがみついて離れない。

杏子「んはああっ♡♡んいっ♡♡そっ、そんな乱暴にっ、っ、突くなあ…っ♡♡」

※「嫌です…っ！杏子さんの身体は…っ、おっぱいもオマンコも…っ、全部俺のものなんですからっ！」



杏子「んおおっ♡おっ、おっ、おおおっ♡♡ふっ、太いのが…っ、奥まで突き上げてきてっ♡♡
んぎっ♡♡」

※「ぐっ、うう……っ！杏子さんのマンコ…っ、締め付け凄すぎ…っ！！回だけじゃなくて…っ、
こっちも食いしん坊な欲張りマンコですね…っ！！」



※「杏子さん…っ、ずっと俺が世話しますから…っ！だからずっと！こんな風にくっついててくださいっ！
ヤドカリとイソキンチャクみたいにっ！」

杏子「んおおっつ、やっ、ヤドカリ…っつ、んああっ♡♡♡」



杏子「んああっ、イクっ♥イクっ♥♥おっ、お前も…っ、一緒に…っ♥♥♥」

※「ええっ、一緒にいきましょう…っ！！俺の証をたっぷり杏子さんの膣内につ、注ぎ込みますからっ！！」



※「はあっ、はあっ、射精るっっっ！！ああ…っ、きよっ、杏子おおおっ！！！！」

思い切り奥にまで肉棒をねじ込み、ありったけの精液を膈内でぶちまける。その瞬間、杏子さんも絶頂に達する。

杏子「っっっっっ————♡♡♡♡♡イッタクウウウウウっっ♡♡♡♡♡」




ずるうん…っ♡ごほお…っ♡
肉棒を引き抜くと、途端に杏子さんの秘裂から精液が溢れ出し、垂れ落ちる。

杏子「はあ……っ、はあ……っ、はあ……っ♡♡♡」


※「はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ、杏子…さん……っ」

杏子さんは何も言わず、ただぎゅっと俺を抱き締めてくれた。その後も何度も繰り返し、俺達は
疲れ果てて眠りに落ちるまでひたすら求め合った。

A modern living room interior. On the left, a silver flat-screen television sits on a dark wood TV stand. A potted plant is next to it. In the center, a two-tiered glass coffee table with metal legs holds a tissue box. To the right, a brown leather sofa with two cushions is visible. A large window in the background is covered with light green curtains featuring a dark green floral pattern. The room has light-colored walls and a wooden floor.

※「杏子さんが帰ってくるまで…あと2週間…」

数日後



俺は悩んでいた。杏子さんがもうすぐ帰ってくる、という事は八千代さんとの関係はもう終わりにしなくてはならない。いつまでもこんな状況が続けば、けじめがつけられなくなってしまう…。八千代さんだって、杏子さんがいない寂しさを俺で紛らわせてるだけ。そうなんだ、最初から俺と八千代さんの間には、何も無かった。

ただ、杏子さんという共通の想い人がいただけ…。



※「よしっ、今日こそ八千代さんに打ち明けて、もうあやふやな関係を続けるのは止めよう。
八千代さんのためにならない、こんな事」

※「確か、今なら八千代さん休憩に入っているはずだよな…。よしっ！」

コシコシ、ガチャ。

※「八千代さんいますか。実は大事な話が…」



※「うわっ！！？え……っ、八千代……さん！？？」


そこにいたのは、なんとも可愛らしい犬耳をつけてコスプレした八千代さんだった。

八千代「あっ、※※君っ♡見て見て、どうかなこの服っ♡可愛らしいでしょう？♡」



八千代「常連のお客様がね、たまには違う制服もいいんじゃないかって皆の分を持ってきてくださって…。まあ、なんとなくその流れで私も着ちゃっただけと…。♡」

※「なっ、なるほど…。しっ、しかしそれは…」
ちよっと性的すぎやしないか？



可愛らしい犬耳としっぽはいいが、その大胆に開いた胸元がなんとも悩ましすぎる。
ただでさえ、八千代さんの胸は大きくて魅力的だというのに。

※「すっ、凄く…良いです…八千代さん」

八千代「わあっ♡ありがとう、※※君っ♡褒めてくれてとっても嬉しいわっ♡」



八千代「それで、さっき言いかけた大事なお話って何かしら？何か悩み事でもあるの？」

※「そっ、それはその……えと……」

目の前にあるおっばいに俺は釘付けになって、思考能力が吹き飛んでしまった。おっばい
おっばいおっばいおっばいおっばいおっばいおっばいおっばいおっばい八千代さんのおっばい……

※「大事な話とはですねっ、その…八千代さんっ！！あの…おっ、おっばい…じゃない、えと…いや…、
やっぱりおっばい…」

八千代「ああ、なるほどっ♡♡わかったわっ、※※君っ♡任せでっ♡」



にゅぷっ♡ぬぷっ♡にゅぼっ♡
俺が腰を八千代さんのおっぱいに叩きつけるように動かすと、中で挟まれて
埋もれている肉棒を抽送させる。

八千代「んあっ、もお〜っ、※※君ったら♡そんなに急がなくてもおっぱいは
逃げないわよ…っ♡」

※「はあっ、はあっ、はあっ！！」



興奮のあまり、夢中になって腰を振る。これじゃあまるで、こっちが犬みたいじゃないか。

八千代「んっ、んんっ♡いいわよっ、※※君の好きなだけ、私のおっぱい使って♡」



※「あぁ、凄っ！ あったかいっ！ 柔らかっ！ 八千代さんのおっぱいの中っ！
たまんないですっ！」

八千代「そうしてくれると嬉しいわぁ…っ♡※※君のオチンチンもっ、すごく熱くなって…
おっぱいの中、ヤケトしちゃいそう…っ♡」



八千代「※※君…っ、ああ…っ、私もドキドキしてきちゃう…っ♥いつでもっ、
射精していいから…っ♥※※君の気持ちいい証っ、おっぱいの中に…っ♥」

※「はあっ、はあっ！！ああ…っっ、もっ、もう駄目だ…っっ！！でっ、射精るっ！！」



※「八千代さんっ、イクっ！！射精るうっっ！！！！」

びゅるるうっっ！！どくどくっ！！！！びゅびゅっ！！
おっほいにみっちり挟まれたまま、射精に達する。勢いよく飛び出し、八千代さんの
身体に降りかかっていく精液。

八千代「んん……っつっ♡♡♡射精たあっ♡♡♡♡」



八千代「ああ…こんなにたくさん射精してくれて…っ、嬉しいわあ…っ♡♡私の
おっばい、そんなに気持ちよかったのね…っ♡♡」

※「ああ…八千代さんのおっばいマンコ…、最高です…っ！」

八千代「続きしたいの？うふふ…っ、じゃあ葵ちゃんのお部屋に…」

※「はあっ、はあっ！それまで待てないっ！八千代さんっ！！」

そう言うと俺は八千代さんを机の上に押し倒し、ぐいっとなぎに彼女のショーツをずり下ろす。彼女のおそこは既に、ショーツに染みが出来るほど濡れていた。

八千代「えっ！？ああっ、駄目っ！※※君っ♡♡♡」



八千代「んあっ、ああっ♡♡駄目っ、そんないきなり激しく…っっ、んああっ♡♡」

※「ああ…八千代さんのアソコ…っっ！凄くぬるぬるになってて気持ちいい…っっ！
こんなに濡らしちゃって…っ！八千代さんはHな人だっ！」



八千代「そっ、それは※※君が…っ！んああっ♡♡奥にっ、おちんちん来るっ♡♡
んひっ、んんうっ♡♡」

※「そんなに大きな声出してる、さすがに聞こえちゃうかもしれませんよっ！ここ休憩室だし！」



※「ああ…っ、この締め具合…っ！！まるでオマンコそのものがチンポにしゃぶりついてきてるみたいだっ！！」

八千代さんの細い両足を掴み、全力の叩きつけピストンで攻め立てていく。あまりの具合の良さに、俺はもう無我夢中で彼女を犯しまくる。

八千代「あっ、あっ、あっ、あーっっ♡♡♡駄目っ、声っ、抑えられないっ♡♡」



※「もっ、もう射精ますよ…っっ！！また膣内に射精しますよっ！！八千代さん…っっ！！『膣内射精して
ください』って言って！早くっ！！」

八千代「んうっっ♡♡やっ、八千代のオマンコに…っっ、なっ、膣内射精してくださあいっ♡♡※※君のっ、
おっ、おちんちん汁うっっ♡♡注ぎ込んでえっ♡♡」



※「ああっ！！射精るっ！！うっっ！！やっ、八千代おおっ！！！！」

どくっ！！びゅるるうっっ！！びゅびゅびゅうっっ！！
2度目の発射にも関わらず、凄い量の精液が一気に肉棒の中を駆け抜け、八千代さんの膈内に注ぎ込まれていく。

八千代「っっっっっっ-----♡♡♡♡♡♡♡♡」



八千代「んはあ…っ、はあ…っ、はあ…っっ♡♡お腹の中…う、いっばあい…っ♡♡※※君のHなお汁で…
たっふたふにされちゃったあ…♡♡」

※「はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ！八千代…さん…っ！」

結局、今日もたっぷり八千代さんとHしてしまった。決断しなくてはいけないと思っているのに、彼女の優しい笑顔を見るとそんな気持ちか吹き飛んでしまう。必死に否定しようとしても出来ない、特別な感情を俺は八千代さんに抱いてしまっていた。

八千代さん…俺は…。

そんな時、ついに恐れていた事が起こってしまった。

ある日



※「ふう〜っ、今日はお客さん多くってキツかったな〜、八千代さんも非番でないし。とにかくやっと休憩に…あれ、なんだ？この旅行カバンは」

休憩室に入ると、そこには見慣れない荷物の山が。

？「ああ、それは私のだ」



杏子「よう、久しぶりだな※※。元気になっていたか？」

※「つつつつ！！！！きよっ、杏子さんつつ！！！！？」

なんと、そこにいたのは杏子さんだった。予定よりも一週間も早い彼女の帰還に俺は思わず驚きと喜びの声を上げた。



※「おっ、おかえりなさいっ！！でも、確か予定じゃ帰ってくるのは来週じゃ…っ！！」


杏子「日程が少々早まってな、帰国したのは一昨日だ。いやー、中々美味かったぞ。外国の料理ってのも」

いつもの調子で淡々と語る杏子さん。思えば今回の件、彼女が何も言わずに長期旅行に行ってしまった事が発端。さすがの俺も、言いたいことは山ほどあった。山ほどあったが…。

杏子「んむうっ！？んん…っ、んちゅ…っ、ぶはあっ♡いっ、いきなりなんだ…っ！♡♡」

思わず杏子さんを抱き締め、接吻する。俺の突然の行動にさすがに戸惑う杏子さん。

※「…俺っ、我慢出来ませんっ！！！」



杏子「んひっ♡あっ、あっ、ああっ♡♡んおおっ♡♡♡」

ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！
再会してまもないにも関わらず、いきなりの挿入。無造作に下着をずり下げられ、壁に押し付けられ、そのいきり立った剛直を突き込まれるこの状況。まるで野生動物の交尾そのものだ。

※「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ！！！」

杏子「いきっ、なりっ、んひっ♡なっ、なんだ…っ♡♡んおおっ♡♡ぼっ、バカあっ♡♡」

※「今までの分っ、ですからねっ！！ああ、やっぱり杏子さんのオマンコだ…っ！！」

杏子「んおおあっ、ふっ、太いっ…っ♡♡♡」



杏子「んおおっっ♡♡♡っっ、強すぎるうっっ♡もっ、もっどゆっ、ゆっぐり…っ♡んあぁっ♡」

※「加減なんてっ、出来るわけっ、ないでしょっ！！思う存分っ、今はっ、杏子さんの身体っ、
楽しませてもらいますからなっ！！」

杏子「んぎっ、んんうっっ♡んあぁっ♡♡」



杏子さんの膣内に入れて俺は確信していた、愛撫もろくにせずの挿入であったにも関わらず、膣内の滞れっぷり、そして彼女の反応、乱れっぷり。前以上の具合の良さ。間違いない。杏子さん自身、3ヶ月ぶりのセックスなんだ。

杏子「んひっ♡んくっ、んんううっ♡♡きっ、気持ちっ♡♡いい…っ♡♡んあっ♡♡」

※「杏子さん…っ！！嬉しいよ…っ！！やっぱりあなたは俺だけの人だ…っ！！」



杏子「あっ、当たり前的事…っ、いっ…っ、なあ…っ♡♡あっ、あっ、あっ♡♡もっ、もっ…っ♡」

※「いきそうなんですっ、杏子さん、イクんですっ！！俺もイクすよっ！一緒に、一緒にイクましょっ！！杏子さんの膣内っ！3ヶ月ぶりのっ！俺の精液ぶちこんでっ！！」

杏子「イクっ♡♡イクっうっ♡♡♡」



※「うおおっ！！射精るっ！！イクっ！！杏子っ、杏子おおっ！！！！」

どびゅびゅっ！！びゅびゅっ！！びゅるるっ！！
思い切り腰を叩きつけ、肉棒を最奥にまでねじ込むと一気に精液を解き放つ。杏子の膈内に
俺の遺伝子が、ドロドロの熱い白濁液が注ぎ込まれていく。

杏子「わっわわわ————♡♡♡♡♡♡♡♡」



杏子「く……っ、はあ……っ♡♡はあ……っ、はあ……っ♡♡♡」

久しぶりの絶頂だったためか、そのままぐったりと壁に倒れこみそうになるほど脱力する杏子さん。肩で大きく息をしながら、絶頂の余韻を味わっているようだ。

※「はあ……っ、杏子さん……っ、大好きです……っ」





杏子「はあ…はあ…、まったくせつかなヤツだな。帰って早々に…っ、ん…っ♡」

そう言いながら、股間から垂れ落ちる精液をティッシュで拭う杏子さん。

※「すみません…っ、でも…っ！俺…っ！！まだまだ、収まりが付きません…っ！！」



杏子「ふう…っ。わかっている、そんなに溜まっているなら、いくらでも付き合っやろう」



杏子「それじゃあ、まず…お前の好きな…っ、これだなっ♥ん…っ、しよ…っと」

ほゅがっ、ほゅぼっ、ぬがっ♡

※「うああ……っ！！杏子さんのパイズリ……っ！！待ってました……っ！！」



杏子「ふっ、子供みたいな声出して…っ♡まったく、さっきまで獣のように私を犯していた男が情けないな…っ♡ん…っ、ふ…っ♡」

※「杏子さんのおっぱいに挟まれて喜ばない男なんて…この世界に存在しませんよ…っ！」



杏子「なんだ、八千代にはしてもらわなかったのか？ちゃんと教えておいたはずだが…」

※「う…っ、それは……」

八千代さんの事が脳裏に蘇る。確かに八千代さんのパイズリも、杏子さんに負けな
くらい…っ、はっ！！…っ、今はその事は考えたくない！



杏子「んっ、ふっ、んん…っっ♡ふふっ、いつものサインだ…っ、お前のチンポがそろそろ我慢出来ないってびくびくし始めたぞ…っ♡」

※「はい…っ、もっ、もう…イキそうです…っ！！」

杏子「構わん…っ、いつでも好きな時に射精せ…っ♡お前の濃い精液…っ、私のおっぱいたっぷりとぶちまけるっ♡」



びゅびゅるるっ！！びゅびゅっ！！どくっ、どくんっ！！
次の瞬間、埋れていた肉棒の先端から勢いよく精液が飛び出し、宙を舞う。

杏子「んん……っ♡♡ははっ、凄い量だな…っ♡♡いいぞ…っ、残らず射精せっ♡」

※「うあっ！！はあ、はあ！！ううっ！！」



ドロ……♡♡♡♡♡

はあ……♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡

杏子「ふう……っ、どうやらやっと止まったようだな……っ♡久しぶりだったが、相変わらずのこの量……っ、それに……このキツい臭い……っ♡懐かしい……っ♡♡」

※「はあ……はあ……っ、ありがとうございました……っ、杏子さん……っ」



ほぶら「あっ、八千代さん来た！」

八千代「ほぶらちゃんっ、杏子さん帰ってきたってほんと！？今どこにいるの！？」

ほぶら「杏子さんなら、今休憩室にいるよっ！良かったね八千代さん、杏子さん帰ってきてっ！」

八千代「ああ…っ、杏子さんっ！八千代はこの目をどれだけ待ち焦がれていましたか…っ！！早く会いたいっ！
お顔を見たいっ！」

慌てて休憩室の前にやってきた八千代。ドアを開けようとする、中から声がある事に気付く。

八千代「…………この声は…、杏子さんと…※※君…………??」



杏子「……………、その……っ、なんだ……、何も…しないのか……」

※「…さて、するってなんでしよう、杏子さん？ちゃんと伝えてくれなきゃ俺もわかりませんよ♪」

杏子「なっ、なに…っ！そんな事…わかってるだる…今更…っ」



※「いつもいつも杏子さんは自分勝手ですからね、たまにはちよっといぢわるしてやらないと。ほらほらっ、どうするんです？」

そう言って杏子さんの秘部を指でなぞる。

杏子「ひぁああっ♡♡こっ、このお……っ♡♡く……っ♡♡しよっ、しょうが…ないな……っ♡」



羞恥心に耐えながら、震えるような小さい声で杏子さんは言った。

杏子「な…膣内に…私のオマンコの中に…っ、入れてくれ…っ♡♡お前の太いチンポで…っ、かき回してくれ…っ♡♡」



※「よく言えまし…たあっ！！！！」

ずぶずぶっ！！ずちゅっ！ずちゅっ！ずぶっ！！
思い切り体重を乗せて、剛直で一気に膣内を貫く。そして間髪入れず叩きつけるようなピストンを開始した。

杏子「んんあああああああ——っっっ♡♡♡♡♡♡」



杏子「んっ、んんっ♡あっ、あっ、あああーっ♡♡オチンポっ、気持ちいいっ♡♡膣内までっ、届いてっ♡♡
最高…だっ♡♡」

※「ああっ、こんなに膣内まで濡らしちゃっっ！！まったく杏子さんはなんていやらしい女性なんだ！！そんなに俺のチンポが欲しいならっ、望みどおりにしてあげますよっ！！」



ガタッ！ガタッ！ガタッ！
ベッド代わりの休憩室の机が、激しいピストンによりガタガタと揺れる。

※「そういえば…杏子さんの初めてをもらったのもこの場所でしたよね…っ！3ヶ月ぶりで忘れかけてるだらうから、この際、しっかりオマンコに教え込んでおかないとっ！杏子さんのオマンコは俺のチンポ専用たって事をつ！」

杏子「んああっ、あっ、あっ、あ————っ♡♡♡♡」



杏子「イク…っ♡♡また…っ、イちゃううっ♡♡♡」

※「杏子さん…っ、愛してます…っ！！大好きですっ！！あぁっ、イキますよ…っ！！また膈内…っ！！
たっぷり注ぎ込みますよ…っ！！！！」

杏子「いいぞっ、こいっ、こい…っ♡♡お前の射精すものっ、全部っ、私の膈内…っ♡♡♡」

どくんっ！！どびゅびゅっ！！びゅるるううっ！！
膣内の一番奥の子宮口に肉棒を叩きつけると、一気に精液を開放した。大量に噴き出した白濁液が、再び杏子さんの腹の中を満たしていく。

杏子「わっわわわわわわわわわ————♡♡♡♡♡♡♡♡」


※「はあっ、はあっ、射精るっ！！！！うううっ、杏子おおっっ！！！！」



射精が終わると、脱力したように杏子さんの上へ倒れこむ。彼女の体もまるで発火しているみたいに熱く、どくどくと強く動悸しているのがわかった。

※「はあ…、はあ…、はあ…、杏子…さん…っ♡♡」

杏子「はあ…、はあ…、はあ……♡♡」



ガタッ！ドアの向こうから急に大きな音が聞こえ、俺は思わず振り向いた。

※「まずいっ！誰かこっちに来たのか！？」

がちやっ！

※「…なんだ、気のせいだったか…？ん…っ、あの後ろ姿は…」

チラリとだけ見えた後姿。私服だったけど、あの長い綺麗な髪の毛は…。

※「や…………っ、八千代…………さんだ…っ！！なっ、なんでここにいるんだよ…………っ！！！！」

翌日から、八千代さんは店に来なくなった。電話しても、ただ風邪を引いたので休むと家族からの返事。…間違いない、俺のせいだ。



ほぶら「※※さんっ！またオーダー間違えてるよっ！味噌ラーメンじゃなくてミートスパゲッティだってばっ！」

※「あっ、ああ…ごめん間違えた…。作り直すよ、すぐ」

ほぶら「どうしちゃったんだる…※※さん。八千代さんが風邪で休んでから様子がおかしいよ」



杏子「……………」

休憩室



※「えっ、俺がクビ…っ！？そんな…っ！なんでですか！」

杏子「一番最初に言ったはずだな、『職場恋愛は禁止する』と。大小を問わず、職場での色恋沙汰はろくなことにならん。特に三角関係で話がこじれると店が機能しなくなって最悪だ。だから、だ」



杏子「今回の一件、八千代がずっと店を休んでいるのもお前がはっきりしない態度を取っていたからだ。
ましてやお前まで仕事が出来んようになるのでは、もうこの店にいてもらう理由がない」

※「そんな…っ！！でも元々は杏子さんが…っ！！それに…っ、俺がいないと杏子さんだって」

杏子「私は違う。舎弟なんていくらでもいる。使えない八千代もお前ももういない」



※「俺だけじゃなくて八千代さんもっ！！そんなひどすぎますよっ、杏子さん！俺はともかく、八千代さんはそんな弱い人じゃない！」

杏子「そんなに八千代の事がわかるなら、お前自身であいつを説得してみたらどうだ。…まあ、私には関係の無い事だな」

突如、杏子さんから突きつけられた三行半。愛する人から冷たく突き放された絶望感に俺は打ちひしがれた。でも…、こんな事にあの人まで巻き込んで不幸にしてしまうのだけは絶対に出来ない。

俺は自然と八千代さんの家にまで足を運んでいた。

八千代さんの実家

初めて来た八千代さんの実家。彼女が以前言っていた通り、刃物全般を取り扱うお店だ。ちょうど店は休みで、家にいるのは八千代さんだけのようだった。

八千代「はい…、って！！※※君っ！！？」

※「どうも…、身体の方は大丈夫ですか、八千代さん。これ、差し入れです」



さっきまで寝ていたのか、寝巻き姿のままの八千代さん。やっぱり風邪は嘘のようだった。
家に上げてもらったものの、何の話をすればいいかもわからず、お互い黙ったまま沈黙の時間が続く。

※「……………」

八千代「……………」



八千代「あっ、あの…っ！ ※※君、ごめんなさいっ！！」

最初に口を開いたのは八千代さんだった。突然頭を下げて謝る彼女。

八千代「私っ、バカだから全然気付かなくて…っ！勝手にっ、思い込んじゃって…っ！色々迷惑ばかりかけてっ！！」



※「そんなん、謝るのは俺のほうだ！八千代さん、ごめんっ！君の気持ちも考えずに…。八千代さんは杏子さんのために頑張ってたのに俺は…」

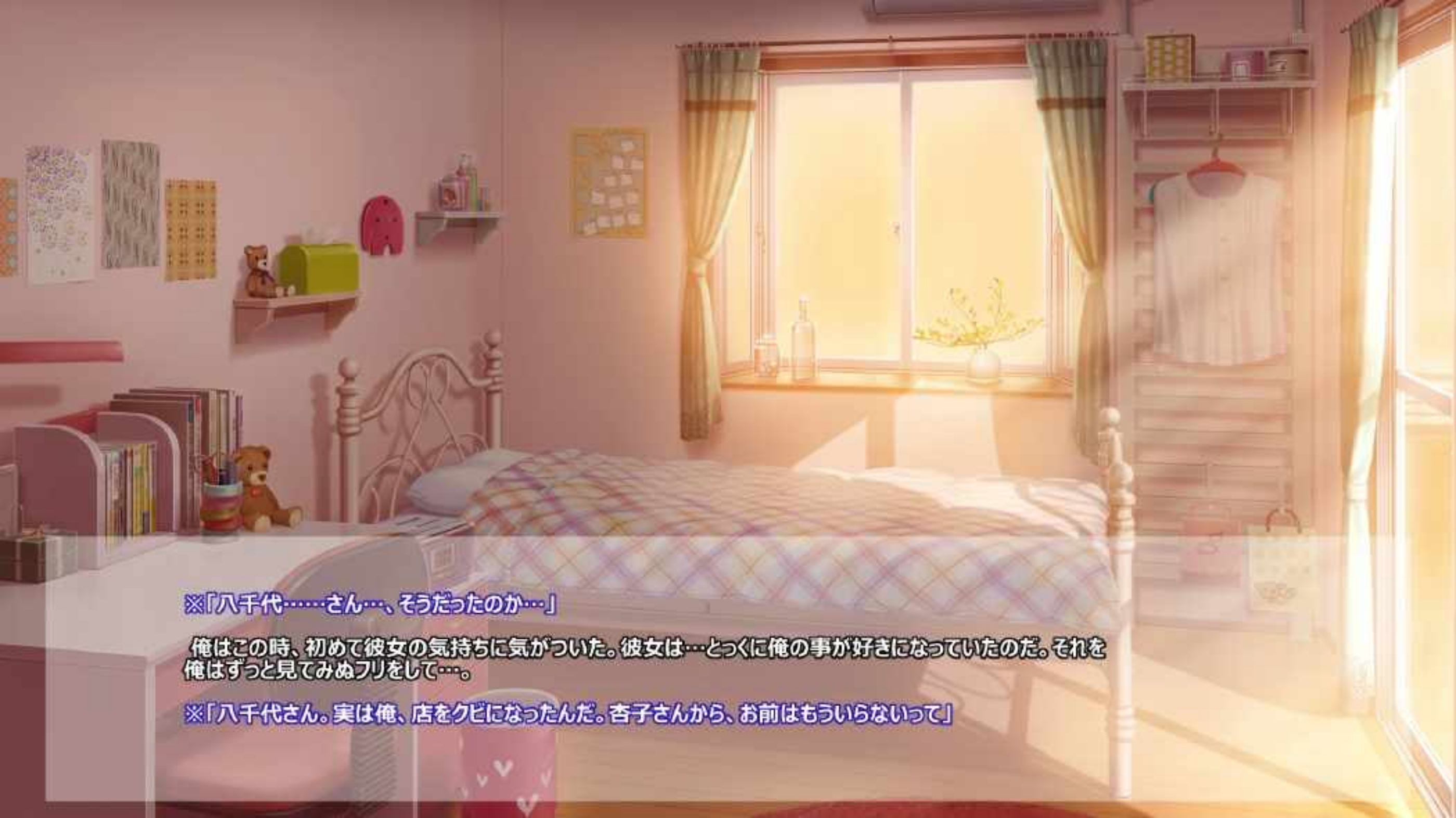
八千代「ちっ、違うの…、そうじゃないの…！」



八千代「私も最初はそう…思ってたんだけど…、その…※※君と杏子さんの関係を知った時…」

※「やっぱり…あの時見てたんだね…」

八千代「あっ、あの時…、なぜか凄く悲しくなって…、杏子さんが取られたって気持ちより、※※君が…杏子さんとHしてるって事に、もやもやしてきちゃって…わけがわからなくなっちゃったの」

A warm, sunlit bedroom. A bed with a white metal frame and a purple and white checkered blanket is the central focus. To the left, a white desk holds a bookshelf with colorful books and a small brown teddy bear. The wall is decorated with several framed pictures and a small shelf with a green box and a red object. A window with light green curtains is in the background, with a vase of yellow flowers on the windowsill. To the right, a white wardrobe with a hanging white shirt and a pink bag is visible. The overall atmosphere is soft and intimate.

※「八千代……さん…、そうだったのか…」

俺はこの時、初めて彼女の気持ちに気がついた。彼女は…とくに俺の事が好きになっていたのだ。それを俺はずっと見てみぬフリをして…。

※「八千代さん。実は俺、店をクビになったんだ。杏子さんから、お前はもういらなくて」



八千代「そんな…っ！！杏子さんが…！！？」

※「だからってわけじゃない…杏子さんにふられたからってわけじゃない。でも、今の俺の本当の気持ちを、伝えるよ。俺は…」



ちゅ
♡♡♡♡♡

ちゅ♡

ちゅ♡



八千代「※※…君……っ」

※「…好きだ、八千代さん」

やっと言えた本当の気持ち。胸の中でもやもやしていたものがスッと無くなった感覚。



八千代「私も……っ!! ※※君……っ!!」

杏子「もしもし、ああ※※か。どうだった？…そうか、八千代とは上手くいったか。それは良かったな」



※「ええ…、これも杏子さんが俺に決心させてくれたおかげです…。はい…っ！ありがとうございますっ！
ほらっ、八千代さんも杏子さんにお礼言わなきゃっ」


八千代「はあっ、んんっ、んああっっ♡♡きよっ、杏子さん…っっ♡私たちの事考えてくれて…っっ♡♡
んんっっ♡やっぱり素敵ですっっ♡ああっ♡♡」

俺の上で夢中になって腰を振りながら、八千代さんは電話に向かってそう叫んだ。



※「それじゃ…また。八千代さん…っ、杏子さんは八千代さんの言うとおりで…っ、あの人がいてこそ…っ、俺達がある…っ！だから俺達は…っ！！」

八千代「ふっ、二人で…っっ♡♡一緒に…っっ♡♡んああっ♡♡好きっ、※※君っ、大好きいっ♡♡」



おっきなおっばいをぶるんぶるん弾ませながら、よがる八千代さん。何もかも受け入れ、もはや縛られるものもない俺達は思う存分セックスに夢中になれる。

※「ああ…っつ！！八千代さん…っつ！！俺も好きだっ！！大好きだよ…っつ！！」

八千代「おっ、お願いっ♡♡八千代って呼び捨てにしてえっ♡♡※※君のものにして欲しいのおっ♡♡」



※「わかったよ…っ、八千代っ！！膈内に射精すぞっ！！俺の精液っ、八千代のオマンコの中に
存分にぶちまけるぞっ！！いいなっ！！」

八千代「きてっ、きてええっ♡♡八千代のオマンコにっ、※※君の熱いオチンチン汁っ、ありっだけたくさん
注ぎ込んでええっ♡♡♡」



※「はあっ、はあっ、うう……っ！ 射精る……っ！！ ああっ、イクっ！ やっ、八千代っ！！
射精るううっ！！！」

どくっ！！ びゅびゅるうううっ！！
膈内で弾ける様に精液が飛び散った。どくどくと力強く脈打ちながら、中に次々と注ぎ込んでいく。

八千代「っくっくっく——♡♡♡♡♡♡♡♡」



八千代「ああ……、お腹……いっぱい……っ♡♡ ※※君の熱いのが…とくとくっていってるのが
わかるわあ…っ♡♡」

※「はあ…はあ…、八千代さんこそ……オマンコきゅうきゅう締め付けてくるよ…まるでチンポを離したく
ないみたいだ…っ」



電話を切り、遠くから八千代の実家を眺める杏子。今回の件、彼女はずっと八千代達の事を見ていたのだ。


杏子「これで上手くいったな…。しかし、明日からどーするかなあ…メシ。まあしょうがないが。
ん？なんだ、また電話…※※からか」

杏子「……二人の仲が戻ったのはよかったです。しかしだな…」



杏子「なっ、なんでこうなるんだっ！！？やっ、八千代っ！ちよっ、ちよっど待て…っっ、んああっっ♡♡
んひっ、んんううっっ♡♡」

八千代「ああ…っ、杏子さんの裸…っ、おっばいもおっまくて素敵…っ♡♡」



※「ねっ、言っただろ八千代。杏子さんもすぐ近くに来てるって。俺達のためにわざとヒーロー役になってくれるなんて…っ！ やっぱり最高だよっ、杏子さんっ！」

杏子「ちよっ、やめっっ♡んひっ♡わっ、私はお前らのためにつっ♡♡んおおっっ♡♡♡」



八千代「だから二人で決めたんです♡これからは…三人で一緒に杏子さんのお世話をしようって♡♡
これならずっと3人仲良く出来ますよねっ♡♡!」

※「そうそう…っ!俺達にとって一番は杏子さんなんだから…っ!寂しい思いさせるわけじゃないですかっ♪!」

杏子「ばっ、バカかお前らっ♡♡そっ、そんな事でいいっ、のかあっ♡♡んああっ♡♡!」



※「ほらほらっ、見てるよ八千代っ！杏子さんのイクとご凄いいからっ♪他じゃ絶対見られないからなっ！」

杏子「んひっ、やめっっ♡♡そっ、それ以上っっ、強くするっ、なあっっ♡イクっっ、やっ、八千代の前でっっ、イクうううっっ♡♡♡」

八千代「はあっ、はあっ、杏子さんっ♡ちゃんと見てますからっ、遠慮しないでイクてくださいっ♡♡」



※「ほらっ、ほらっ！！イケっ！！杏子さんっ！八千代さんの目の前でっ！だらしない顔見せてっ！
うおおあっっ！！射精るっっ！！杏子おおっっ！！！！」

どくんっ！！びゅびゅびゅるるううっ！！
杏子さんの膣内で精液が爆発するように噴き出し、子宮口を熱い白濁液が直撃する。

杏子「っっっっっっっ-----♡♡♡♡♡♡♡」



八千代「すごいっ、すごい〜っ♡♡ああ…っ、杏子さんのイキ顔…っ、かっヨイイ…っ♡♡」

杏子「んはあ……っ、はあ…っ、はあ…っ♡♡♡」

※「ぷはあ…っ、はあ…っ、これからも…ずっと3人一緒ですよ…杏子さん…♪」

※「それじゃ、八千代。杏子さんに今度は八千代がイクところ見てもらおうよ」

八千代「はい…っ♡それじゃあお願いします…っ、杏子さん。八千代のはHでしたないところ、見てくださいっ♡」

※「杏子さんもいいけど、ちゃんとオマンコにも集中してくれよなっ、八千代っ！しっかり杏子さんの前でイかせてやるからっ！」

八千代「もっ、もちるん…っ♡んひゃ、んうっ♡♡ああっ♡♡」

杏子の豊満なおっぱいに顔を埋めながら、俺の繰り出す激しいピストンに喘ぐ八千代さん。ああ、なんて俺は贅沢者なんだろう…っ！杏子さんだけでなく、八千代さんまで…っ！

あ♡

あ♡

アッ！
アッ！
アッ！

八千代「んああっ♡♡ああっ♡ああっ♡※※君のオチンポっ、すっごくいいっ♡♡んああっ♡♡
八千代のオマンコっ、かき回されちゃうっ♡♡」

※「いいだろっ、八千代っ！杏子さんのオマンコかき回したばかりのチンポでっ、八千代のオマンコ
突きまくってるぞっ！オマンコの間接キスだっ！」

八千代「はああっ♡♡杏子さんっ、杏子さあんなっ♡♡」



杏子「ふっ、よしよし…っ、※※ともすっかり上手くやってるようじゃないか…っ♡えらいぞ、八千代っ♡」

八千代「ふおおあっ♡♡きよ、杏子さんに褒められて…っ、ああっ♡♡イクっ、イっちゃいますっ♡♡
きよ、杏子さんの前でっ、あっ、あっ、あ——っっ♡♡♡」

アッ!

アッ!

アッ♡

杏子「無事終わったな…、凄かったぞ八千代…。まだまだ子供のように思っていたお前が…
すっかり女らしくなって♡」

八千代「はあ…っ、はあ…っ、これも…っ、杏子さんと※※雪のおかげ…っですっ…っ♡♡♡」

※「はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ！ どちらこそ…だよ、八千代、杏子さん…っ！」

はあ…っ♡

はあ…っ♡





杏子「…やれやれ、せっかく身を引いてやろうと思ったのに…。二人ともいいのか？私がいでも」

※「ええ、もちろんですとも！いいじゃないですか、ねえ八千代さん♪」

八千代「はいっ♡※※君も、私も、杏子さんあってのものなんですからっ♡」



※「俺達二人はこれからもずっと杏子さんのお世話しますからっ！」

杏子「…やっぱり私たちは全員が変わり者で変なヤツ…だな♡」

八千代「はいっ♡」

数ヶ月後



※「ふう~~~~っ、やっぱり天然温泉の露天風呂は違うなあ~~~~っ。あ~~~~っ、良い気持ちだあ……っ」

数ヵ月後、俺は店の休みを利用して温泉旅行に来ていた。家の風呂とはわけが違う、圧倒的広さ、湯加減の良さ、景色の美しさが俺に安らぎを与えてくれる。

※「さて…、そろそろかな~~~~っ」



八千代「お待たせ〜、※※君っ♡うわ~~~~っ、広~~いっ♡♡温泉ですよ、杏子さん♡♡」

杏子「あぁっ、そうだな」

※「うお.....っ、すっ、すげえ.....ゴクッ」



ふっふっ♡

ふっふ♡

ふっふ♡

そういつて登場したのはもちるん、杏子さんと八千代さん。温泉旅行の主役のお二人さんだ。ここは混浴可の露天風呂なので、俺はこうやって堂々と二人の裸を眺められるわけだ。

すらりと伸びた長い手足、引き締まった腰のくびれ、たっぷり豊満な胸…。二人とも揃ってプロモデル顔負けのナイスボディだ。

杏子「…※※、今のお前、スケベ心が丸出しな顔してるぞ。きもちわりーな」



ドキドキ♡

ふん♡

ふん♡

※「凄いで見とれてたんですよ…。ホント、杏子さんも八千代も良い身体してる…最高の女だ」

八千代「うふふ、ありがとう※※君っ♡でもっ、私よりも杏子さんの方がもっと素敵だわっ♡」

杏子「そう…っ、まじまじと言われると、さすがにちょっと照れるな」



八千代「さあさあ、杏子さんっ♡早くお風呂に入りましたよっ♡♡私っ、温泉入るの初めてっ♡」

杏子「んっ、そうだな……」

八千代「やたいけないっ、※※君ったらこんなところでおっきくしちゃって…っ♡」

※「えっ、ああ…ははっ、これは…」

杏子「お前の事だ、どうせ最初から期待してたんだろ？全くしょうがないな…八千代」

八千代「はいっ、杏子さんっ♡」



たっぷりおっさいおっぱいが、四方向から俺の肉棒をがっちりと
ホールドし、肉棒を抜く。杏子さん八千代さん両方の体温に包まれて、
俺の肉棒は今すぐ「でも暴発してしまいそう」だ。

八千代「おっさい♡オサレ♡チンポ♡おっさい♡おっさい♡おっさい♡おっさい♡
くれてくれるのね♡♡♡君…♡♡♡」

杏子「…だけの特別サービス…おっさい♡おっさい♡おっさい♡おっさい♡」



八千代「はあ……はあ……♡♡わっ、私も……杏子さんのおっぱい……
擦れて……、変な気持ちになってきちゃった……♡♡」

杏子「んく……っ、八千代の乳首がヨリヨリして……っ、ん……っ♡♡」

八千代「ほらっ、××君もそろそろなんですよ……♡遠慮しないで
たっくさんが精してね……♡♡」



※「はあ……っ、はあ……っ……あぁっ……もっ、もう射精ますっ……
ふっ、二人ともっ……俺の精液を受け取れっ……射精するっ……」

おっぱいの谷間に挟まれたまま、宙に向けて精液を解き放った。

八千代「きゃあっ……♡♡♡射精だわっ♡♡♡はあ……っ♡♡♡」

杏子「んっ……♡♡♡♡♡♡」



シロ...

おあーっ

ぐちゃぐちゃ

杏子「みっ...っ♡全く風呂に入っている最中だというのが...また汚れてしまったぞっ♡」

八千代「それ...はあ...の臭い...っ♡♡♡凄く生臭いの...の...」

※「はあ...っ♡はあ...っ♡はあ...っ♡」

その夜



杏子「は〜っ、食べた食べた。海外料理も美味かったが、やはり和風が一番だな」

八千代「はあ…っ、あれだけの料理はペロリっ♥さすが、杏子さん…っ、かっこいい…っ♥」

※「いつもながら、相変わらず驚きの食事量ですね…」



杏子「さて、メシも食って満足したし…、そろそろいつものやるか？」

※「その言葉を待ってました♪じゃあ早速…」

八千代「あのっ、ちょっとその前に…二人ともお話してもいいかな。将来の事について…なんだけど」



杏子「どうした八千代。仕事のことか？」

八千代「そうじゃなくて…その、昨日の事なんだけど…夢を見たの」

※「夢の話？」



八千代「そうなのっ♥それでね…その夢の中で…っ、私と杏子さんが…赤ちゃん抱いてる夢だったの」

※「ういっっ!!!」

杏子「………そういえば、偶然だな。私も昨日八千代と同じような夢を見たぞ」



八千代「まあっ、凄い偶然っ♥やっぱりこれって神様からのお告げなのかしら…っ♥♥それでね…っ」

…まさか、だから赤ちゃん欲しい、なんて話になるんじや…。

八千代「コウノトリさんがっ、いつでも赤ちゃんを運んできてくれるよう、これからは窓のカギを開けておこうと思うのっ♥」

杏子「なるほど…っ、確かにカギがかかっているは入ってこれんな」



八千代「あらっ、どうしたの※※君。急にひっくり返ったりして」

※「いえ…っ、なんでもありません…(二人揃ってコウノトリ未だに信じてるとか…似たもの同士だなあ全く)」

とはいえ、これは八千代さんも杏子さんも子作り願望があるって考えていいんだらうか。
もちろん、俺だって今まで考えてなかったわけじゃない。



※「えと…つまり、八千代も杏子さんも子供が欲しいって思ってる、って事でいいですか？」

八千代「う…うんっ、まあ…その…っ、えへへ…っ♥」

杏子「そういう事に…なるな、確かに」

※「じゃわかりました。俺も腹決めましたんで、頑張りますよ。二人のために」

八千代「頑張るってどういう…あっ、あの…っ、きやっ！！んああ……っ♡♡♡」

※「まずは八千代からね…、何も考えなくていいから。俺に任せて」



八千代「んああっ♡んひっ、んんうっ♡あっ、あっ、ああっ♡♡」

ずぶっ！ずぶっ！ずぶっ！
彼女の両足を掴み、最も深いところを重点的に攻め立てるようにして膣内を突く。

※「皆で元気な赤ちゃん…っ、作るうなっ！八千代っ！！」



八千代「はあっ、はあっ、あっ、赤ちゃん…作るっでえ？♡♡どっ、どういう…っ、んひっ♡♡」

※「こうやって八千代と仲良くしてる、コウノリさんが運んできてくれるって事さ…っ！」

八千代「そっ、そうなん…あひっ♡♡んんっ、ああっ♡♡」



八千代「んいっっ♡♡いっ、いつもっ、なんだが違っっ♡♡※※君のおちんちんっ♡♡
私のっ、敏感なところをっ、攻め立ててきてるうっっ♡♡」

※「はあっ、はあっ、はあっ！これも…っ、赤ちゃん作るためのコツ…さっ！八千代が気持ちよくなるほど…っ！いいんだよ…っ！だから遠慮しないでっイってくれっ！」



八千代「んああっ!! あっ、あっ、あーっ!! 駄目っ、激しっ♡♡んひゃ、息がっ、
でっ、出来な…っ♡♡んああっ♡♡イクっ、イクっうっ♡♡」

※「はあっ、ふうっ、はあっ!! ああ…っ、一緒にイこうっ! 俺も射精すよ…っ!! 赤ちゃんの素っ、
八千代の腹ン中になっ、思いっきりちまけるよっ!!」



八千代「あっ、あっ、あ——っっ!! イっくううううううっっっっ♡♡♡♡♡」

※「うおおあっ!! 射精るっ!! やっ、八千代っ!! 孕めよっ! 俺の子をっ!!
中でっ、孕めえええっ!!!」

どっ!!! どっどっ!! ひゅひゅうううっ!!!
俺の期待と希望を込めて、八千代さんの膣内にありっだけの精液をぶちまけた。



たっ♡♡♡

はぁ♡

はぁ♡



たっ♡♡♡

八千代「はぁ…っ、はぁ…っ、はぁ…っ♡♡私い…っ、濡く…っ、イちゃったあ…っ♡♡
おっ、オチンチン気持ちよすぎでえ…、わけわかんなくなるっ…っ♡♡」

※「はぁっ、はぁ…っ！わかるかい…っ、八千代。俺の射精した精液っ、ちゃんと腹の中にまで届いているかい…？」

八千代「うん…っ♡♡君のあったかチンポ汁…っ、中でタボタボいってるよお…っ♡♡」

※「お待たせしました…っ、次は杏子さんの番…ですよっ♪」

杏子「おっ、おう…っ、なっ、なんだか今のお前、いつもと違う気がするぞ…。わっ、私はちょっと遠慮して…」

※「いーえっ、駄目ですっ♪逃がしませんよ…っ♪」

杏子「んああああっっっ♡♡♡ちよっ、やめ…っっ♡♡♡あっ、あっ、あっ、あ—っ♡♡♡」

※「杏子さんにもっ、しっかり種付けしてあげますからねっ！ふうっ、はあっ、ふうっ！」

杏子さんの腰をがっちりと掴み、後ろから極太の肉棒を高速で膣内に打ち込む。こうなってはもう彼女に逃げる術はない。



杏子「んひっ、んうっっ♡やっ、やっぱり♡いつもとっ、ちっ、違っ♡♡んあっ♡♡
ふっ、太いのが奥までっ♡んおっ♡♡」

※「当たり前ですよ…っ、今回は今までのような遊びじゃないですからね…っ♪大事な
大事な…赤ちゃん作るための儀式ですからっ！」

杏子「あっ、赤ちゃんつく…っ！？♡んぐうっっ♡♡」



※「ねえっ、杏子さんは男の子と女の子、どっちが欲しいんですかっ！今ならまだっ、リクエスト出来ますよっ！」

杏子「んひっっ♡どっ、どっちでもおっ、わっ、私はおっ♡♡かっ、構わんっ♡♡」



※「ふふ…っ、それじゃあっ！今から仕込みますよ…っ！杏子さんのお腹にっ！俺のっ！種をっ！！八千代と二人揃ってボテ腹にしてやりますっ！！」

杏子「んあああっっ♡♡あっ、あっ、あっ、あ————っっ♡♡♡♡」

確実に子宮の中へとびきり濃い精液を打ち込むために、まるで削岩機のような強烈な突き込みを杏子さんの一番弱いところにガンガン打ち込んでいく。



杏子「あひいっ、んひい……っ♡♡んお……っ、膣内でえっ、おっ、お前の射精した
熱いのがあっ、ドブドブっでえっ……っ♡♡♡」

※「はあ、はあ……っ、きっと必ず……っ、出来ますよ……っ、杏子さんと俺の……赤ちゃん……っ」

杏子「赤……ちゃん……っ♡♡はあ……っ♡♡♡」

はあっ♡

はあっ♡

ド
ド
ド
ド
ド
♡
♡
♡
♡
♡

ド
ド
ド
♡



翌年

あれから月日は流れ、舞台は再びワグナリア。店ではいつもと変わらぬ彼女達の可愛い声が聞こえてくる。

ほぶら「ありがとうございましたあ〜っ！あ〜っ、早く片付けないと〜っ」

八千代「あっ、ほぶらちゃんいいわよ♪後片付けなら私がするからっ♪」

おんがら

ほふら「いいよいいよ～っ、今八千代さんは大事な時期なんだからっ♪カ仕事は私達に任せておいてっ♪」

八千代「そう～？なんだか悪いわね～、皆に負担かけちゃって」

アハハハ



アハハハ

そういいながら八千代さんは、すっかり大きくなったお腹を重そうに抱え、背を反らした。まるで大きなスイカを抱えているみたいに、丸く突き出したポテ腹。そう、彼女は今妊娠しているのだった。

ぽぷら「へーきだよ♪皆楽しみにしてるんだよっ、八千代さんの赤ちゃんが生まれるの！」

ぽぽぽ



ぽぽぽ

そういいながら八千代さんは、すっかり大きくなったお腹を重そうに抱え、背を反らした。まるで大きなスイカを抱えているみたいに、丸く突き出したポテ腹。そう、彼女は今妊娠しているのだ。

ぽぽら「へーきだよ♪皆楽しみにしてるんだよ、八千代さんの赤ちゃんが生まれるの！」



八千代「ありがとうほぶらちゃん、私頑張るわねっ♡赤ちゃんが生まれるまで、一生懸命働くわ」

ほぶら「うんっ、一緒に頑張ろうっ！八千代さんっ」



※「専用のバッジをつけば妊娠中であっても積極的に仕事に参加出来る…か。会社の方針とはいえ、そんな規則があるとは俺もびっくりですよ」

杏子「別にいいんじゃないか。少子化対策と女性労働者優遇政策を兼ねているらしいし。まあ、どうせ私は動かないし、いるだけで給料もらえるからありがたいがな」

※「はは…っ、杏子さんは相変わらずですね」



※「もうすぐお母さんになるっていうのに」

妊娠しているのは杏子さんも同じだった。八千代さんよりもさらに一回りは大きいお腹。特別に新調してもらったマタニティタイプの制服ではあるものの、それでもサイズが合わず、スカートが締まらないので下着が丸見えた。

女性の積極的な社会参加を推進する会社の方針でこんな事になっているわけだが…。



杏子「※※こそ、いきなり二人の父親だぞ。ちゃんと覚悟しているんだろ？」

※「もちるんですよ、だから俺も正社員になったわけですし」

杏子さんらの妊娠が発覚し、俺は夢を諦めワグナリアにこのまま勤める事を決意した。元々杏子さんの代わりに経営の仕事もやっていた実績が買われ、俺はマネージャーへと昇格。つまり、杏子さんは俺の部下って事になる。

つたね



つたね

※「俺はもう杏子さんの上司ですからね、命令する権利があるって事ですよね♪」

杏子「上司になったからって偉そうにする…っ、んん…っ♡なよ…っ♡仕事は…っ、出来んぞ…っ♡」

※「あるじゃないですか…今の杏子さんに出来る仕事が♪」



※「俺はもう杏子さんの上司ですからね、命令する権利があるって事ですよね♪」

杏子「上司になったからって偉そうにする…っ、んん…っ♡なよ…っ♡仕事は…っ、出来んぞ…っ♡」

※「あるじゃないですか…今の杏子さんに出来る仕事が♪」

杏子「んあっ♡あふっ、んんっ、んうっ♡あっ、あっ、あ——っ♡♡」

※「はあっ、はあっ、はあっ！どうやって、俺にポテ腹マンコを楽しませるのがっ、杏子さんのっ
今のお仕事ですよっ！」

そういつて俺は杏子さんを壁に押し付け、本能のままに腰を振る。妊娠によってさらに浅く
狭くなった膣内の具合は最高だ。

あっ!

んん!

んんん!

んんん!

んんん!

杏子「んひっ♡んんうっ♡すっ、少しはっ、えっ、遠慮しろっ♡♡にっ、妊娠する前よりもっ、
がっ、がっつきすぎたぞっ♡んあっ♡♡」

※「だって…っ、しょうがないじゃないですかっ！そんなでかいポテ腹して…っ！俺に種付けされた
事アピールしてっ！興奮しないわけがないっ！」



杏子「んあっ♡あふっ、んんっ、んうっ♡あっ、あっ、あ——っ♡♡」

※「ふっ！はあっ！ふっ！ああ〜っ、杏子さんの臨月ポテ腹マンコっ！締まるうっ！あと少しで赤ちゃんが出てくる穴って思えないっ！」

赤ちゃんが出てくる時大変なんじゃないかと心配になるくらい、杏子さんのアソコはぐいぐいと俺の肉棒を締めつけてくる。

ふっ！
はあっ！
ふっ！
ああ〜っ！

ふっ！
はあっ！
ふっ！
ああ〜っ！

ふっ！
はあっ！
ふっ！
ああ〜っ！

杏子「んあっ♡あふっ、んんっ、んうっ♡あっ、あっ、あ——っ♡♡」

※「ふっ！はっ！ふっ！ああ〜っ、杏子さんの臨月ポテ腹マンコっ！締まるうっ！あと少しで赤ちゃんが出てくる穴って思えないっ！」

赤ちゃんが出てくる時大変なんじゃないかと心配になるくらい、杏子さんのアソコはぐいぐいと俺の肉棒を締めつけてくる。

ふっ！
はっ！
ふっ！
あふっ！

ふっ！
はっ！
ふっ！
あふっ！

んんっ！
んうっ！
あふっ！
あふっ！

杏子「あぁ、あぁ、あーっ♡♡もっ、もう…っ、いっ、イクっ♡♡だっ、駄目だ…っ♡♡
イクっ♡♡」

※「俺もっ、一緒ですよっ！杏子さんっ、一緒にいきましょうっ！！ポテ腹マンコにっ！！
もうすぐ赤ちゃん出てくる臨月妊婦の膈内にっ！！精液ぶちまけますよっ！！」

杏子「こいっ、こいっ♡♡おっ、お前のとびきり熱いのっ♡なっ、膈内にっ♡♡」



※「うおおっ！！射精るっ！！射精すぞっ！！ああっっ、杏子おおおっっ！！！！」

どくっ！！！！びゅびゅるるううっっ！！！！
ハァン！！と最後に思いきり腰を杏子さんのお尻に叩きつけ、子宮口に肉棒をねじ込むと一気に精液を解き放った。

杏子「わっわわわわ————♡♡♡♡♡♡」





はあっ♡

杏子「んひいっ、んんうっ♡♡はあっ、はあっ♡♡んおっ……おおっ♡♡」

声にならない声を上げて、うねるような快感の波に飲まれる杏子さん。全身をふるふると震わせながら、その絶頂の余韻に浸る。

※「はあっ、はあっ、たっぷり射精してあげましたよっ、杏子さん！わかりますかっ」

杏子「んおおっ♡あっ、熱い……っ♡♡」

はあっ♡

おっ♡
おっ♡
おっ♡
おっ♡
おっ♡

八千代「はぁ…っ、はぁ…っ♡♡お腹に赤ちゃんいるから…優しくしてねっ、※※君…っ♡
んああっっ♡♡」

※「もちろんわかってるよ、八千代♪」



八千代「んああっ♡♡※※君のオチンポっ、奥にまで届いてるう…っ♡あっ、あっ、ああっ♡♡」

※「わかるかい、八千代っ！俺の肉棒が今っ、赤ちゃんの寝てる部屋の入り口をコツコツってノックしてるよっ！
ふふっ、赤ちゃんが起きちゃうかもねっ♪」




あぁっ♡♡

おっ♡

八千代「んああっ♡♡※※君のオチンポっ、奥にまで届いてるう…っ♡あっ、あっ、ああっ♡♡」

※「わかるかい、八千代っ！俺の肉棒が今っ、赤ちゃんの寝てる部屋の入り口をコツコツってノックしてるよっ！
ふふっ、赤ちゃんが起きちゃうかもねっ♪」



今夜は八千代さんが俺の部屋に泊まるというので、早速二人でポテ腹セックスを堪能中だ。おっきくなった臨月ポテ腹を俺の目の前に突き出し、腰を動かして快感に喘ぐ彼女。

※「まったくこんな大きいお腹でそんないやらしい声出して…、八千代は本当にはしたくない子だなっ！」

八千代「んっ、あひっ、んんっっ♡はいっ、やっ、八千代は妊娠中でも※※君のオチンポが恋しくなっちゃういけない子ですっ♡♡」



八千代「だっ、だからっ、もっとオチンポでオシオキしてくださ…っっ♡んああっっ♡♡♡」

※「ふっ、いやれなくてもっ、たっぷり突きまくってやるよっ、八千代っ！！ああ、もっともっと
乱れてくれっ！俺を楽しませてくれっ！」



八千代「んああっ♡♡好きっ、好きなのおっ♡♡オチンポで膣内をかき回されるのがっ♡♡
※※君に犯されるのが好きいいっ♡♡あっ、あっ、あーっ♡♡」

※「八千代っ!! あっ、八千代っ!!! はっ、はっ、はっ!!!」



ビクッ♡

あーっ！

あーっ！

あーっ！

どくんっ！！ひゅひゅっ！！ひゅるるううっ！！
深く奥まで突き刺さった肉棒から、一気に精液が噴き出し、八千代の子宮口に直撃する。その熱い
ほどはしりに彼女も絶頂に達した。

八千代「わっわわわー♡♡♡♡♡♡」

※「うおおっ！！しっ、締まるううっ！！やっ、八千代おおっ！！！！」



八千代「はあ…っ！はあ…っ！はあ……っ♡♡♡お腹いっぱい♡♡♡※※君のおちんちん汁で、
八千代のオマンコ…っ、あっつあつっ……っ♡♡♡」

※「はあ…っ、はあ…っ、俺も…気持ちよかったよ…っ、八千代……っ」

八千代「んっ、んんっ♡ぢゅぶっ♡ぢゅっ、ぢゅっ♡ぢゅろろっ♡♡」

※「うおお…っっ！吸い取られる…っっ！！気持ちいいよ、八千代…っっ！」

Hの後のお風呂で、早速八千代にしゃぶられる。こうやってお風呂でフェラしてもらうのも最近はずっかり日課になっている。



八千代「んんっ♡おひんぽっ、おいひいっ♡♡ちゅるっ、ちゅばぽっ♡んぐっ♡」

※「ふふっ、そんなに俺のチンポが美味しいのかい、八千代♪お前の大好物だもんな、遠慮しないでたっぷりしゃぶってくれよ…っ♪」



※「ああ…いいぞ～、八千代…っ。すっかりフェラが上手になっちゃってさ…っ♪しっかり
精液飲んで、お腹の赤ちゃんの栄養にするんだぞ…っ」

八千代「ふあい…っ♡んん、んちゅ、ぢゅるるっ♡♡」

八千代の膝の上に重そうに乗っかっているポテ腹とおっぱい。彼女がこれから飲み込む
精液は確実に消化され、栄養として吸収されるわけだ。

栄養♡

ポテ♡

※「ああ…いいぞ～、八千代…っ。すっかりフェラが上手になっちゃってさ…っ♪しっかり
精液飲んで、お腹の赤ちゃんの栄養にするんだぞ…っ」

八千代「ふあい…っ♡んん、んちゅ、ぢゅるるっ♡♡」

八千代の膝の上に重そうに乗っかっているポテ腹とおっぱい。彼女がこれから飲み込む
精液は確実に消化され、栄養として吸収されるわけだ。

栄養♡

ポテ♡

八千代「んぢゅっ♡ぢゅっ、ぢゅっ♡ぢゅばっ♡ぢゅるるるううっ♡♡♡」

※「あぁ、もうやばいっ！射精るっ！このまま射精すからなっ、しっかり口で全部受け止めるよっ、八千代っ！一滴残らずっ、飲み干すんだっ！！」



どびゅびゅっ！！びゅびゅっ！びゅるるっ！！
一瞬肉棒が膨らんだかと思うと、中から押し出されるように濃い精液が一気に噴き出し、
八千代の喉奥に直撃する。

八千代「んぶちっ♡♡♡んんっ、んぐっ、んううっ♡♡♡」

※「あくっ、ううっ！！はあっ、はあっ！！まだ…っ、射精るっ！！」



八千代「ふう〜…っ、ふう〜…っ、ふう〜…っ♡♡」

根元まで肉棒を咥えこんだまま、苦しそうに鼻で息をする八千代。彼女の口の中は今、俺の吐き出した精液でいっぱい。

※「はあ…っ、はあ…っ！ いいぞ…八千代…。後はじっくりゆっくり俺の精液を味わってから、飲むんだぞ…っ♪」





※「大丈夫か、八千代。お風呂、狭くないか？」

八千代「うんっ、平気♥はあ…気持ち良い…っ♥うふふっ、杏子さんも来れば良かったのに〜」

※「さすがに今の俺の部屋じゃ、3人が泊まるには窮屈だからね。しょうがないさ」



※「来月中には、きっと良いマンション見つけるから楽しみにしてくれよ。今の3倍くらい広い部屋にするからさ。
風呂場だってうんと広くするぞ♪」

八千代「わあっ、楽しみっ♡そうになったら杏子さんと私達の5人で生活出来るわねっ♡期待してるわっ、※※言っ♡」



※「新しい住まいで、八千代と杏子さんの赤ちゃん、しっかり育てあげたいからさ。俺、頑張るよ」

八千代「うん…っ、私も一緒に頑張る…っ♡」

こうして俺は、妊娠中であっても二人と仲良く楽しくセックスライフを送っていた。それからさらに数週間後、いよいよ二人のお腹が大きくなってきた頃、俺達は再びあの場所へやっていた。



※「ふう〜〜〜っ！約一年ぶりかあ〜っ、ここも…♪やっぱり温泉はいいよなあ〜、身体にも良いし」

そう、以前来た温泉にまた旅行に来ていたのだ。そして俺は前回よりもさらに踊るような気持ちでそわそわしながら、主役がやってくるのを待ち構えていた。すると…



お尻のポリッパ

ゆさっ、たぶっ、ゆさっ♡
おっきなお腹を抱え、ゆさゆさと揺らしながらその主役がやってきた。

八千代「うふふっ、お待たせ～、※※君っ♡」

杏子「ふう～…っ。いつも一人で先に入っていないで、少しは私たちの着替えとか手伝え」

ア
ッ
♡

ア
ッ
♡

※「ほあ~~~~っ、すっごい.....っ！！」

二人揃ってそのおっきく突き出たポテ腹。まさに圧巻のボリュームだ。そのお腹に鏡餅みたいなのっかってる爆乳おっぱいが、さらにエロスを引き立てている。これはもはや芸術だ。

八千代「うふふっ、~~お~~君っては見とれちゃって...っ♡♡そんなにジロジロ見られると恥ずかしいわっ♡」

アッ
ッ
ッ
♡

アッ
ッ
♡

※「ほあ~~~~っ、すっごい.....っ！！」

二人揃ってそのおっきく突き出たポテ腹。まさに圧巻のボリュームだ。そのお腹に鏡餅みたいなのっかってる爆乳おっぱいが、さらにエロスを引き立てている。これはもはや芸術だ。

八千代「うふふっ、~~おっぱい~~君っては見とれちゃって...っ♡♡そんなにジロジロ見られると恥ずかしいわっ♡」



※「こんなの…見るなっていう方が酷ってんですけど…。二人とも凄いな…っ！お腹の中で今赤ちゃん達が眠ってるわけですね…」

杏子「そうだよ、お前が私達を騙して仕込んだ種だ♡おかげで重くて敵わんがな…♡」

八千代「まあまあ杏子さんっ♡ ※ ※君は私たちの気持ちを汲んで、赤ちゃんを授けてくれたのよねっ♡ 嬉しいわあ…っ♡ありがとう、※ ※君っ♡」



※「お礼をいうのはこっちですよ。二人とも本当にありがとう、俺頑張って働いて育てるよ。
だから杏子さんも八千代も、元気な赤ちゃん産んでくれよな」

八千代「もっちょろ〜んっ♡任せてっ♡」

杏子「心配せずともお前と私の子供だ、何も問題はないさ」

その夜



八千代「あっ、あっ、あっ、あっ♡♡※※君っ、んああっ♡♡♡」

※「んん、どうだっ！気持ち良いか、八千代っ！！おらっ、おらっ、おらっ！！どうだっ、俺のチンポはっ！」

お風呂が澄むと早速八千代さんと夜のお楽しみに入る。湯船に浸かって暖まった彼女の身体、膣内も程好くほぐれて美に良い具合だ。



八千代「いいっ、いいすっ♡♡※※君のオチンポっ、八千代の一番気持ち良いところっ、
んんうっ♡ゴツゴツっで突いてきてえっ♡♡」

※「俺もだっ、八千代っ!!お前の膣内っ、俺のチンポに絡み付いてきて離さないぞっ!
全く臨月妊婦だというのにっ、淫乱なオマンコだなっ!」

ふぁっ♡

ふぁっ♡

八千代「だっ、だっ♡♡気持ちいいからっ♡♡オチンポでガンガン突かれるの大好きだからっ♡♡
あっ、あっ、あ——っ♡♡♡」

※「そうだっ、もっとよがっていいぞっ！俺を楽しませてくれっ！八千代っ！！もっと乱れたお前が見たいっ！
ボテ腹でイキまくるお前の顔をっ！！」

ふぁっ♡

70
シル♡

八千代「だっ、だっ♡♡気持ちいいからっ♡♡オチンポでガンガン突かれるの大好きだからっ♡♡
あっ、あっ、あ——っ♡♡♡」

※「そうだっ、もっとよがっていいぞっ！俺を楽しませてくれっ！八千代っ！！もっと乱れたお前が見たいっ！
ボテ腹でイキまくるお前の顔をっ！！」



八千代「んあっ!! もっ、もうイキますっ♡♡八千代っ、極太オチンポに突かれてっ♡♡
イっちやいますっ♡♡♡」

※「はあっ、はあっ! 俺も射精すぞっ!! 八千代の膣内にっ!! とびきり濃い射精すぞっ!!
いいかっ、八千代っ!!」

八千代「射精してっ、射精してえっ♡♡八千代のポテ腹マンゴにっはい膣内射精してえっ♡♡」



八千代「はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ♡♡んああ…っっ、わたし…っ、またあ…っ、膣内射精
されちゃったあ…っ♡赤ちゃんいるのはい…っ♡清液で、オマンコの中いっはいにされ
ちゃったあ…っ♡♡」

※「はあ…っ、はあ…っ、ふふっ、八千代…。お腹の赤ちゃんもさっさから元気に動いているよ…♪
きっと八千代の気持ちいいのが伝わっちゃったんたるうね…っ♪」



杏子「……んっ、なんだ、八千代は先にもう寝たのか」

※「あっ、杏子さんおかえりなさい。どこ行ってたんですか？」

杏子「いや……っ、ん……っ、なんでもない……。それよりもだ、これからどうする？もう寝るか？」



※「まさか♪まだまだ…夜はこれからじゃないですか♪」

杏子「ふっ、そういうと思った。しょうがないな…まったく」

そういうと杏子さんは俺の目の前に立ち、しゅると浴衣の帯を解いていく。



※「ごく…っ、やっぱり凄いです。杏子さんのお腹。多分、八千代さんより早く生まれそうですね」

杏子「…だな、私もそう思う…っ」



思わず杏子さんのポテ腹に頬ずりし、手で優しく撫でる。とくっ、とくっとお腹の中で確かに感じる赤ちゃんの鼓動。なんと神秘的なんだろうか。

※「ああ…いるいる…、ちゃんと中で赤ちゃんが寝てますよ……っ♪」

ぽんぽん

ぽんぽん

思わず杏子さんのポテ腹に頬ずりし、手で優しく撫でる。とくっ、とくっとお腹の中で確かに感じる赤ちゃんの鼓動。なんと神秘的なんだろうか。

※「ああ…いるいる…、ちゃんと中で赤ちゃんが寝てますよ……っ♪」



杏子「そっ、そうだな……。んっ…！さあ…、やるならさっさとしろ…※※」

※「えっ？ああ…はい、わかりました…」

妙に急かしてくる杏子さんに、少し違和感を感じつつも俺は彼女の身体を引き寄せ、抱き締めた。



※「あっ！！射精るっ！！膣内に射精しますよっ！！杏子さんっ！！うぐっ！！」

杏子「んうあっっ♡♡♡♡♡」

勢い良く奥まで突き上げると、子宮口に肉棒を密着させたまま熱いほとぼしりを放つ。白濁粘液が次から次へと注ぎ込まれていく。

杏子「はうう……っ♡♡♡んんうう……っ♡♡♡」



ずるんっ！ゴボ…ツッ！
肉棒を引き抜くと、一瞬遅れてゴボリと音を立てて精液が秘裂から溢れだした。

※「はあ…っ、はあ…っ、杏子さん…っ、大好きです…っ」

杏子「はあ…っ、はあ…っ、そうか…っ♡だっ、だがそろそろ…限界だ…っ、うぐぐ…っ！」



※「限界って…？えっ、まっ、まさか杏子さん……！？」

杏子「ああ…そのまさかだ…♥実はさっきからもう…『始まって』いてな…っ♥いっ、痛みを紛らわそうと
してたんだが…っ、うぐ…っ！！」

そういうと、どんどん杏子さんの呼吸が荒くなり、鼓動が早くなっていく。密着したお腹から伝わってくる
赤ちゃんの胎動も今までになく激しい。



杏子「んあぁあっつっ!!!!」

突然の杏子さんの叫びと共に、秘裂から大量の液体と共に赤ちゃんの頭が飛び出してきた。まさか、こんな時にお産が始まってしまうとは！

※「そっ、そんな杏子さん、なぜそれを早く言わないんですか！！このままじゃ…っ！！」



杏子「はあっ、はあっ！ いっ、いいから…っ！ このままじっとしている…っ！ 抱き締めさせて…くれっ！
おっ、お願い…っ！！ うぐっ、うううっ！！」

今までになく強い力でぎゅっと抱き締めてくる杏子さん。それはまるで俺に助けを求めるかのよう。

※「…わかりました…っ！ じゃあ杏子っ！ もっと強くイキめっ！！ 赤ちゃんを押し出すんだっ！！」



杏子「うぐっ、うああ！！んああああああっ！！！！！！」

メリメリメリッ！！ぶしゅああああっ！！
彼女の悲鳴と共に、膣肉を引き裂き大きな赤ちゃんがついに外へ飛び出した。

※「うおおっ！！うっ、生まれたっ！生まれましたよ！杏子さんっ！！」



杏子「うぐっ、うああ！！んああああああっっっ！！！！！！」

メリメリメリッ！！ぶしゅああああっっ！！
彼女の悲鳴と共に、膣肉を引き裂き大きな赤ちゃんがついに外へ飛び出した。

※「うおおっ！！うっ、生まれたっ！生まれましたよっ！杏子さんっ！！」



杏子「はあ……っ、はあ……っ、そうが……っ♡♡良かった……っ♡お前と作って……お前と一緒に産んだ……
赤ちゃんだからな……っ♡♡」

苦痛を乗り越え、安堵の表情を見せる杏子さん。力を使い切ったのか、俺はその身を委ねぐったりとして
いる。そのすぐ後ろでは生まれたばかりの可愛い赤ちゃんが元気な泣き声を聞かせてくれる。

※「凄く元気な赤ちゃんが生まれましたよ…、お疲れさまです…、杏子さん…」

杏子「はあ…はあ…、すまん…お産が近いのを黙っていて…。出来れば産む前にもう一度…」

※「わかっていますよ、杏子さん…。俺も嬉しかったですから」

杏子さんの出産から遅れること2週間、ついに八千代さんにもその時がやってきた。

八千代「んあああっ！！ああああああ——っっ！！！！！！」

八千代さんの叫び声と同時に、彼女の秘裂部から赤ちゃんの頭部が顔を覗かせた。陣痛が始まってから約1時間後、予想以上に早いペースでのお産だ。かねてから覚悟していた出産の苦痛に耐えながら、必死にイキむ八千代さん。

杏子「しっかりしろ、八千代！大変なのはここからだぞっ！！」



八千代「ふぐっ！！うううっ！！いっ、いたおい…っ！！あ、あそこが裂けるっ…っ！！
はあ…っ！！はあ…っ！！」

※「頑張れっ、八千代！もっとしっかりイキむんだっ！赤ちゃんもうすぐ出てくるぞ！俺も
杏子さんもついてるからっ！」

八千代「はあっ、はあっ！うっ、うんっ！！わっ、私っ、頑張る…っ！！うあっ！！」

うんっ！！

うんっ！！

うんっ！！

八千代「んぐっ！！うっっ！！はぁっ、はぁっ！！あっ、赤ちゃあんっ！！おっ、
お願いっ！！はっ、早く出てきてええっ！！！！」

必死にイキみ続ける八千代さん。膣穴に対してあまりに大きすぎるそれは、出口で引っかかっているようで中々外に出ようとしない。彼女がイキむ度に、秘裂からは鮮血の湿った羊水が噴出し、垂れ落ちる。



八千代「んああっ！！あああああ——つっつっ！！！！」

ぶしゅっ、ぶしゅあああっ！！！！
秘裂を引き裂き、鮮血を撒き散らしながらついに赤ちゃんが外へ飛び出した。杏子さんの
赤ちゃんと同じくらい、かなり大きな子だ。

※「やっ、やった！！生まれたぞっ、八千代っ！！赤ちゃん生まれたっ！！」



八千代「んぐっ！！うっっ！！はぁっ、はぁっ！！あっ、赤ちゃんっ！！おっ、
お願いっ！！はっ、早く出てきてええっ！！！！」

必死にイキみ続ける八千代さん。膣穴に対してあまりに大きすぎるそれは、出口で引っかかっているようで中々外に出ようとしない。彼女がイキむ度に、秘裂からは鮮血の混じった羊水が噴出し、垂れ落ちる。





八千代「はあ……っ、はあ……っ、わっ、私……っ、やったの……っ？赤ちゃん……っ、生まれてくれたあ……？」

赤ちゃん「ほぎやっ、ほぎやっ♡」

※「ああっ、この通り元気な女の子だよっ、八千代！良く頑張った！これでお前もお母さんたなっ！」

はあ……♡

はあ……♡

ぽん♡


ごきゅん♡

八千代「はあ…っ♡♡私…っ、嬉しい…っ♡♡※※君の赤ちゃん…っ、杏子さんと
同じ赤ちゃん産めて…っ♡♡幸せよ…っ♡♡」

※「ああ…、俺もだよ八千代。俺の赤ちゃん産んでくれて…ありがとな…愛してる」



3年後



※「はあ〜っ、疲れた〜。ただいま〜っ！」



八千代「おかえりなさい〜っ、あなたっ♡♡」

杏子「やっと帰ってきたか。寒いのを我慢してずっと待ってたんだぞー」


仕事から帰った俺を愛する二人が、なんとまああられもない姿で出迎えてくれる。



※「わおおっ！こりゃあ一気に疲れもぶっとびそうだよ、二人とも♪」

八千代「やったあっ♡ほらほらっ、杏子さんが♡やっぱり♡喜んてくれましたよっ♡」

杏子「支部長に昇任したお前に、サービスしなくちゃって八千代がなっっ」



その後俺はさらにその働きぶりが認められ、支部長へと昇任。給与がさらに倍増した。杏子さんと八千代さんは子育てに専念するために揃って退職。それからというもの、毎日あれこれと俺の世話を焼いてくれているというわけだ。

※「いつもありがとう、杏子さん、八千代。俺、子供たちのためにも頑張るよっ！」

八千代「うふふっ♥でもねっ、※※君。お仕事もいいけど…そろそろっ♥ねっ、杏子さんっ♥」



杏子「あっ、ああ…。そうだな…。子育てもひと段落ついたし、次のをだな…♡」

ああ、なるほど。そういうわけか♪こんなカッコウになったのも、その意思表示ってわけだ♪

※「わかりました…っ！それじゃあ早速、3人揃って励むとしますかっ！」

おしまい

あれから月日は流れ、舞台は再びワグナリア。店ではいつもと変わらぬ彼女達の可愛い声が聞こえてくる。

ほぶら「ありがとうございましたあ〜っ！あ〜っ、早く片付けないと〜っ」

八千代「あっ、ほぶらちゃんいいわよ♪後片付けなら私がするからっ♪」

おんがら

ほふら「いいよいいよ～っ、今八千代さんは大事な時期なんだからっ♪カ仕事は私達に任せておいてっ♪」

八千代「そう～？なんだか悪いわね～、皆に負担かけちゃって」



グイッ♡

そういいながら八千代さんは、すっかり大きくなったお腹を重そうに抱え、背を反らした。まるで大きなスイカを抱えているみたいに、丸く突き出したポテ腹。そう、彼女は今妊娠しているのだった。

ぽぷら「へーきだよっ♪皆楽しみにしてるんだよっ、八千代さんの赤ちゃんが生まれるの！」

ぽぷら♡



ぽぷら♡

そういいながら八千代さんは、すっかり大きくなったお腹を重そうに抱え、背を反らした。まるで大きなスイカを抱えているみたいに、丸く突き出したポテ腹。そう、彼女は今妊娠しているのだった。

ぽぷら「へーきだよっ♪皆楽しみにしてるんだよっ、八千代さんの赤ちゃんが生まれるの！」



八千代「ありがとうほぶらちゃん、私頑張るわねっ♡赤ちゃんが生まれるまで、一生懸命働くわ」

ほぶら「うんっ、一緒に頑張ろうっ！八千代さんっ」



※「専用のバッジをつけば妊娠中であっても積極的に仕事に参加出来る…か。会社の方針とはいえ、そんな規則があるとは俺もびっくりですよ」

杏子「別にいいんじゃないか。少子化対策と女性労働者優遇政策を兼ねているらしいし。まあ、どうせ私は動かないし、いるだけで給料もらえるからありがたいがな」

※「はは…っ、杏子さんは相変わらずですね」



※「もうすぐお母さんになるっていうのに」

妊娠しているのは杏子さんも同じだった。八千代さんよりもさらに一回りは大きいお腹。特別に新調してもらったマタニティタイプの制服ではあるものの、それでもサイズが合わず、スカートが締まらないので下着が丸見えた。

女性の積極的な社会参加を推進する会社の方針でこんな事になっているわけだが…。



杏子「※※こそ、いきなり二人の父親だぞ。ちゃんと覚悟しているんだろ？」

※「もちろんですよ、だから俺も正社員になったわけですし」

杏子さんらの妊娠が発覚し、俺は夢を諦めワグナリアにこのまま勤める事を決意した。元々杏子さんの代わりに経営の仕事もやっていた実績が買われ、俺はマネージャーへと昇格。つまり、杏子さんは俺の部下って事になる。

つたね



つたね

※「俺はもう杏子さんの上司ですからね、命令する権利があるって事ですよね♪」

杏子「上司になったからって偉そうにする…っ、んん…っ♡なよ…っ♡仕事は…っ、出来んぞ…っ♡」

※「あるじゃないですか…今の杏子さんに出来る仕事が♪」



※「俺はもう杏子さんの上司ですからね、命令する権利があるって事ですよね♪」

杏子「上司になったからって偉そうにする…っ、んん…っ♡なよ…っ♡仕事は…っ、出来んぞ…っ♡」

※「あるじゃないですか…今の杏子さんに出来る仕事が♪」

杏子「んあっ♡あふっ、んんっ、んうっ♡あっ、あっ、あ——っ♡♡」

※「はあっ、はあっ、はあっ！どうやって、俺にポテ腹マンコを楽しませるのがっ、杏子さんのっ
今のお仕事ですよっ！」

そういつて俺は杏子さんを壁に押し付け、本能のままに腰を振る。妊娠によってさらに浅く
狭くなった膣内の具合は最高だ。

あっ!

んん!

んんん!

んんん!

んんん!

杏子「んひっ♡んんううっ♡すっ、少しはっ、えっ、遠慮しろっ♡♡にっ、妊娠する前よりもっ、
がっ、がっつきすぎたぞっ♡んああっ♡♡」

※「だって…っ、しょうがないじゃないですかっ！そんなでかいポテ腹して…っ！俺に種付けされた
事アピールしてっ！興奮しないわけがないっ！」



杏子「んあっ♡あぶっ、んんっ、んうっ♡あっ、あっ、あ——っ♡♡」

※「ふっ！はっ！ふっ！ああ〜っ、杏子さんの臨月ポテ腹マンコっ！締まるうっ！あと少しで赤ちゃんが出てくる穴って思えないっ！

赤ちゃんが出てくる時大変なんじゃないかと心配になるくらい、杏子さんのアソコはぐいぐいと俺の肉棒を締めつけてくる。

ふっ！
はっ！
ふっ！
あーっ！

ふっ！
はっ！
ふっ！
あーっ！

ふっ！
はっ！
ふっ！
あーっ！

杏子「んあっ♡あふっ、んんっ、んうっ♡あっ、あっ、あ——っ♡♡」

※「ふっ！はっ！ふっ！ああ〜っ、杏子さんの臨月ポテ腹マンコっ！締まるうっ！あと少しで赤ちゃんが出てくる穴って思えないっ！」

赤ちゃんが出てくる時大変なんじゃないかと心配になるくらい、杏子さんのアソコはぐいぐいと俺の肉棒を締めつけてくる。

ふっ！
はっ！
ふっ！
あふっ！

ふっ！
はっ！
ふっ！
あふっ！

ふっ！
はっ！
ふっ！
あふっ！

杏子「あぁ、あぁ、あーっ♡♡もっ、もう…っ、いっ、イクっ♡♡だっ、駄目だ…っ♡♡
イクっ♡♡」

※「俺もっ、一緒ですよっ！杏子さんっ、一緒にいきましょうっ！！ポテ腹マンコにっ！！
もうすぐ赤ちゃん出てくる臨月妊婦の膈内にっ！！精液ぶちまけますよっ！！」

杏子「こいっ、こいっ♡♡おっ、お前のとびきり熱いのっ♡なっ、膈内にっ♡♡」



※「うおおっ！！射精るっ！！射精すぞっ！！ああっっ、杏子おおおっっ！！！！」

どくっ！！！！びゅびゅるるううっっ！！！！

ハァン！と最後に思いきり腰を杏子さんのお尻に叩きつけ、子宮口に肉棒をねじ込むと一気に精液を解き放った。

杏子「わっわわわわ————♡♡♡♡♡♡」





杏子「んひい…っ、んんう…っ♡♡はあっ、はあ…っ♡♡んお…っおお…っ♡♡」

声にならない声を上げて、うねるような快感の波に飲まれる杏子さん。全身をふるふると震わせながら、その絶頂の余韻に浸る。

※「はあ…っ、はあ…っ、たっぷり射精してあげましたよ…っ、杏子さんっ！わかりますか…っ」

杏子「んおお…っ♡あっ、熱い…っ♡♡」

八千代「はぁ…っ、はぁ…っ♡♡お腹に赤ちゃんいるから…優しくしてねっ、※※君…っ♡
んああっっ♡♡」

※「もちろんわかってるよ、八千代♪」



八千代「んああっ♡♡※※君のオチンポっ、奥にまで届いてるう…っ♡あっ、あっ、ああっ♡♡」

※「わかるかい、八千代っ！俺の肉棒が今っ、赤ちゃんの寝てる部屋の入り口をコツコツってノックしてるよっ！
ふふっ、赤ちゃんが起きちゃうかもねっ♪」



あぁっ♡♡

おっ♡

八千代「んああっ♡♡ ※君のオチンポっ、奥にまで届いてるう…っ♡あっ、あっ、ああっ♡♡」

※「わかるかい、八千代っ！俺の肉棒が今っ、赤ちゃんの寝てる部屋の入り口をコツコツってノックしてるよっ！
ふふっ、赤ちゃんが起きちゃうかもねっ♪」



今夜は八千代さんが俺の部屋に泊まるというので、早速二人でポテ腹セックスを堪能中だ。おっきくなった臨月ポテ腹を俺の目の前に突き出し、腰を動かして快感に喘ぐ彼女。

※「まったくこんな大きいお腹でそんないやらしい声出して…、八千代は本当にはしたくない子だなっ！」

八千代「んっ、あひっ、んんっっ♡はいっ、やっ、八千代は妊娠中でも※※君のオチンポが恋しくなっちゃういけない子ですっ♡♡」



八千代「だっ、だからっ、もっとオチンポでオシオキしてくださ…っっ♡んああっっ♡♡♡」

※「ふっ、いやれなくてもっ、たっぷり突きまくってやるよっ、八千代っ！！ああ、もっともっと
乱れてくれっ！俺を楽しませてくれっ！」



八千代「んああっ♡♡好きっ、好きなのおっ♡♡オチンポで膣内をかき回されるのがっ♡♡
※※君に犯されるのが好きいいっ♡♡あっ、あっ、あーっ♡♡」

※「八千代っ！！ああ、八千代っ！！！！はあっ、はあっ、はあっ！！」



ビクッ♡

とっ！

おっ！

おっ！

どくんっ！！ひゅひゅっ！！ひゅるるううっ！！
深く奥まで突き刺さった肉棒から、一気に精液が噴き出し、八千代の子宮口に直撃する。その熱い
ほどはしりに彼女も絶頂に達した。

八千代「わっわっわっ♡♡♡♡♡♡」

※「うおおっ！！しっ、締まるううっ！！やっ、八千代おおっ！！！！」



八千代「はあ…っ！はあ…っ！はあ……っ♡♡♡お腹いっぱい♡♡♡※※君のおちんちん汁で、
八千代のオマンコ…っ、あっつあつっ……っ♡♡♡」

※「はあ…っ、はあ…っ、俺も…気持ちよかったよ…っ、八千代……っ」

八千代「んっ、んんっ♡ぢゅぶっ♡ぢゅっ、ぢゅっ♡ぢゅろろっ♡♡」

※「うおお…っっ！吸い取られる…っっ！！気持ちいいよ、八千代…っっ！」

Hの後のお風呂で、早速八千代にしゃぶられる。こうやってお風呂でフェラしてもらうのも最近はずっかり日課になっている。



八千代「んんっ♡おひんぽっ、おいひいっ♡♡ちゅるっ、ちゅばぽっ♡んぐっ♡」

※「ふふっ、そんなに俺のチンポが美味しいのかい、八千代♪お前の大好物だもんな、遠慮しないでたっぷりしゃぶってくれよ…っ♪」



※「ああ…いいぞ～、八千代…っ。すっかりフェラが上手になっちゃってさ…っ♪しっかり
精液飲んで、お腹の赤ちゃんの栄養にするんだぞ…っ」

八千代「ふあい…っ♡んんっ、んちゅっ、ぢゅるるっ♡♡」

八千代の膝の上に重そうに乗っかっているポテ腹とおっぱい。彼女がこれから飲み込む
精液は確実に消化され、栄養として吸収されるわけだ。

栄養♡

ポテ♡

※「ああ…いいぞ～、八千代…っ。すっかりフェラが上手になっちゃってさ…っ♪しっかり
精液飲んで、お腹の赤ちゃんの栄養にするんだぞ…っ」

八千代「ふあい…っ♡んんっ、んちゅっ、ぢゅるるっ♡♡」

八千代の膝の上に重そうに乗っかっているポテ腹とおっぱい。彼女がこれから飲み込む
精液は確実に消化され、栄養として吸収されるわけだ。

栄養♡

ポテ♡

八千代「んぢゅっ♡ぢゅっ、ぢゅっ♡ぢゅばっ♡ぢゅるるるううっ♡♡♡」

※「あぁ、もうやばいっ！射精るっ！このまま射精すからなっ、しっかり口で全部受け止めるよっ、八千代っ！一滴残らずっ、飲み干すんだっ！！」



どびゅびゅっ！！びゅびゅっ！びゅるるっ！！
一瞬肉棒が膨らんだかと思うと、中から押し出されるように濃い精液が一気に噴き出し、
八千代の喉奥に直撃する。

八千代「んぶちっっ♡♡♡んんっ、んぐっ、んううっ♡♡♡」

※「あくっ、うっっ！！はあっ、はあっ！！まだ…っ、射精るっっ！！」



八千代「ふう〜…っ、ふう〜…っ、ふう〜…っっ♡♡」

根元まで肉棒を咥えこんだまま、苦しそうに鼻で息をする八千代。彼女の口の中は今、俺の吐き出した精液でいっぱい。

※「はあ…っ、はあ…っ！ いいぞ…八千代…。後はじっくりゆっくり俺の精液を味わってから、飲むんだぞ…っ♪」





※「大丈夫か、八千代。お風呂、狭くないか？」

八千代「うんっ、平気♥はあ…気持ち良い…っ♥うふふっ、杏子さんも来れば良かったのに〜」

※「さすがに今の俺の部屋じゃ、3人が泊まるには窮屈だからね。しょうがないさ」



※「来月中には、きっと良いマンション見つけるから楽しみにしてくれよ。今の3倍くらい広い部屋にするからさ。
風呂場だってうんと広くするぞ♪」

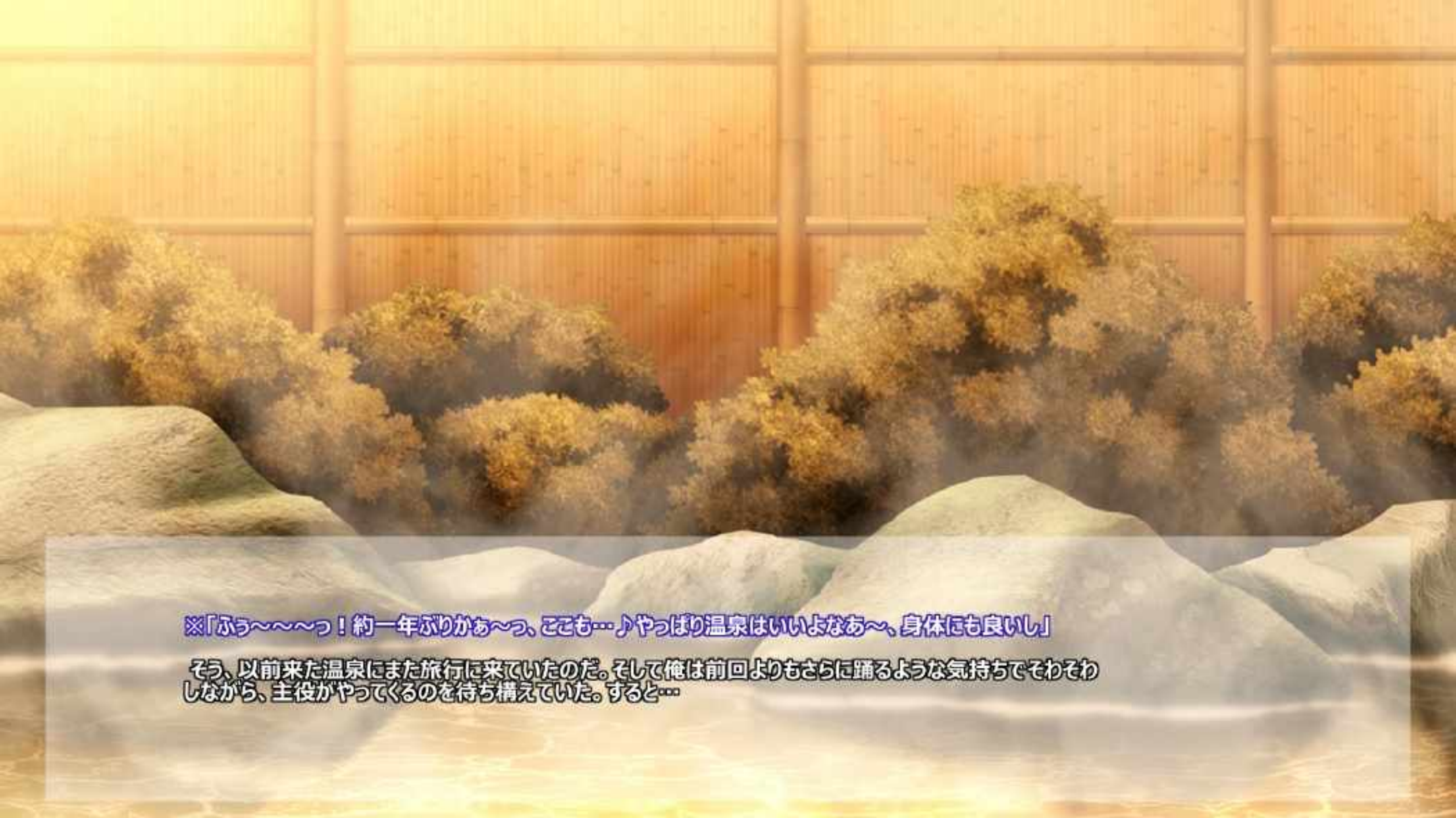
八千代「わぁっ、楽しみっ♡そうになったら杏子さんと私達の5人で生活出来るわねっ♡期待してるわっ、※※言っ♡」



※「新しい住まいで、八千代と杏子さんの赤ちゃん、しっかり育てあげたいからさ。俺、頑張るよ」

八千代「うん…っ、私も一緒に頑張る…っ♡」

こうして俺は、妊娠中であっても二人と仲良く楽しくセックスライフを送っていた。それからさらに数週間後、いよいよ二人のお腹が大きくなってきた頃、俺達は再びあの場所へやっていた。



※「ふう〜〜〜っ！約一年ぶりかあ〜っ、ここも…♪やっぱり温泉はいいよなあ〜、身体にも良いし」

そう、以前来た温泉にまた旅行に来ていたのだ。そして俺は前回よりもさらに踊るような気持ちでそわそわしながら、主役がやってくるのを待ち構えていた。すると…



お尻のポリッパ

ゆさっ、たぶっ、ゆさっ♡
おっきなお腹を抱え、ゆさゆさと揺らしながらその主役がやってきた。

八千代「うふふっ、お待たせ～、※※君っ♡」

杏子「ふう～…っ。いつも一人で先に入っていないで、少しは私たちの着替えとか手伝え」

ア
ッ
ッ
♡

ア
ッ
ッ
♡

※「ほあ~~~~っ、すっごい……………っ！！」

二人揃ってそのおっきく突き出たポテ腹。まさに圧巻のボリュームだ。そのお腹に鏡餅みたいなのっかってる爆乳おっぱいが、さらにエロスを引き立てている。これはもはや芸術だ。

八千代「うふふっ、………君っては見とれちゃって…っ♡♡そんなにジロジロ見られると恥ずかしいわっ♡」

ア
ッ
ッ
♡

ア
ッ
♡

※「ほあ~~~~っ、すっごい.....っ！！」

二人揃ってそのおっきく突き出たポテ腹。まさに圧巻のボリュームだ。そのお腹に鏡餅みたいなのっかってる爆乳おっぱいが、さらにエロスを引き立てている。これはもはや芸術だ。

八千代「うふふっ、~~おっぱい~~君っては見とれちゃって...っ♡♡そんなにジロジロ見られると恥ずかしいわっ♡」



※「こんなの…見るなっていう方が酷ってんですけど…。二人とも凄い…っ！お腹の中で今赤ちゃん達が眠ってるわけですね…」

杏子「そうだよ、お前が私達を騙して仕込んだ種だ♡おかげで重くて敵わんがな…♡」

八千代「まあまあ杏子さんっ♡ ※ ※君は私たちの気持ちを汲んで、赤ちゃんを授けてくれたのよねっ♡ 嬉しいわあ…っ♡ありがとう、※ ※君っ♡」



※「お礼をいうのはこっちですよ。二人とも本当にありがとう、俺頑張って働いて育てるよ。
だから杏子さんも八千代も、元気な赤ちゃん産んでくれよな」

八千代「もっちょろ〜んっ♡任せてっ♡」

杏子「心配せずともお前と私の子供だ、何も問題はないさ」

その夜



八千代「あっ、あっ、あっ、あっ♡♡※※君っ、んああっ♡♡♡」

※「んんっ、どうだっ！気持ち良いかっ、八千代っ！！おらっ、おらっ、おらっ！！どうだっ、俺のチンポはっ！」

お風呂が澄むと早速八千代さんと夜のお楽しみに入る。湯船に浸かって暖まった彼女の身体、膣内も程好くほぐれて美に良い具合だ。



八千代「いいっ、いいすっ♡♡※※君のオチンポっ、八千代の一番気持ち良いところっ、
んんうっ♡ゴツゴツっで突いてきてえっ♡♡」

※「俺もだっ、八千代っ！！お前の膣内っ、俺のチンポに絡み付いてきて離さないぞっ！
全く臨月妊婦だというのにっ、淫乱なオマンコだなっ！」

ふぁっ♡

70
シル♡

八千代「だっ、だっ♡♡気持ちいいからっ♡♡オチンポでガンガン突かれるの大好きだからっ♡♡
あっ、あっ、あ——っ♡♡♡」

※「そうだっ、もっとよがっていいぞっ！俺を楽しませてくれっ！八千代っ！！もっと乱れたお前が見たいっ！
ボテ腹でイキまくるお前の顔をっ！！」

ふぁっ♡

70
シル♡

八千代「だっ、だっ♡♡気持ちいいからっ♡♡オチンポでガンガン突かれるの大好きだからっ♡♡
あっ、あっ、あ——っ♡♡♡」

※「そうだっ、もっとよがっていいぞっ！俺を楽しませてくれっ！八千代っ！！もっと乱れたお前が見たいっ！
ボテ腹でイキまくるお前の顔をっ！！」



八千代「んあっ！！もっ、もうイキますっ♡♡八千代っ、極太オチンポに突かれてっ♡♡
イっちやいますっ♡♡♡」

※「はあっ、はあっ！俺も射精すぞっ！！八千代の膣内にっ！！とびきり濃い射精すぞっ！！
いいかっ、八千代っ！！」

八千代「射精してっ、射精してえっ♡♡八千代のポテ腹マンコにっはい膣内射精してえっ♡♡」



八千代「はあ…っ、はあ…っ、はあ…っ♡♡んああ…っっ、わたし…っ、またあ…っ、膣内射精
されちゃったあ…っ♡赤ちゃんいるのはい…っ♡清液で、オマンコの中いっはいにされ
ちゃったあ…っ♡♡」

※「はあ…っ、はあ…っ、ふふっ、八千代…、お腹の赤ちゃんもさっさから元気に動いているよ…♪
きっと八千代の気持ちいいのが伝わっちゃったんたるうね…っ♪」



杏子「……んっ、なんだ、八千代は先にもう寝たのか」

※「あっ、杏子さんおかえりなさい。どこ行ってたんですか？」

杏子「いや……っ、ん……っ、なんでもない……。それよりもだ、これからどうする？もう寝るか？」



※「まさか♪まだまだ…夜はこれからじゃないですか♪」

杏子「ふっ、そういうと思った。しょうがないな…まったく」

そういうと杏子さんは俺の目の前に立ち、しゅると浴衣の帯を解いていく。



※「ごく…っ、やっぱり凄いです。杏子さんのお腹。多分、八千代さんより早く生まれそうですね」

杏子「…だな、私もそう思う…っ」



思わず杏子さんのポテ腹に頬ずりし、手で優しく撫でる。とくっ、とくっとお腹の中で確かに感じる赤ちゃんの鼓動。なんと神秘的なんだろうか。

※「ああ…いるいる…、ちゃんと中で赤ちゃんが寝てますよ……っ♪」



あーん

あーん

思わず杏子さんのポテ腹に頬ずりし、手で優しく撫でる。とくっ、とくっとお腹の中で確かに感じる赤ちゃんの鼓動。なんと神秘的なんだろうか。

※「あぁ…いるいる…、ちゃんと中で赤ちゃんが寝てますよ……っ♪」



杏子「そっ、そうだな……。んっ…！さあ…、やるならさっさとしろ…※※」

※「えっ？ああ…はい、わかりました…」

妙に急かしてくる杏子さんに、少し違和感を感じつつも俺は彼女の身体を引き寄せ、抱き締めた。



※「あっ！！射精るっ！！膣内に射精しますよっ！！杏子さんっ！！うぐっ！！」

杏子「んうあっっ♡♡♡♡♡」

勢い良く奥まで突き上げると、子宮口に肉棒を密着させたまま熱いほとぼしりを放つ。白濁粘液が次から次へと注ぎ込まれていく。

杏子「はうう……っ♡♡♡んんうう……っ♡♡♡」



ずるんっ！ゴボ…ツッ！
肉棒を引き抜くと、一瞬遅れてゴボリと音を立てて精液が秘裂から溢れだした。

※「はあ…っ、はあ…っ、杏子さん…っ、大好きです…っ」

杏子「はあ…っ、はあ…っ、そうか…っ♡だっ、だがそろそろ…限界だ…っ、うぐぐ…っ！」



※「限界って…？えっ、まっ、まさか杏子さん……！？」

杏子「ああ…そのまさかだ…♥実はさっきからもう…『始まって』いてな…っ♥いっ、痛みを紛らわそうと
してたんだが…っ、うぐ…っ！！」

そういうと、どんどん杏子さんの呼吸が荒くなり、鼓動が早くなっていく。密着したお腹から伝わってくる
赤ちゃんの胎動も今までになく激しい。



んっ! ぐわっ!

んっ!

ぐわっ!

んっ! ぐわっ!

杏子「んあああっつっ!!!!」

突然の杏子さんの叫びと共に、秘裂から大量の液体と共に赤ちゃんの頭が飛び出してきた。まさか、こんな時にお産が始まってしまうとは！

※「そっ、そんな杏子さん、なぜそれを早く言わないんですか！！このままじゃ…っ！」



杏子「はあっ、はあっ！ いっ、いいから…っ！ このままじっとしている…っ！ 抱き締めさせて…くれっ！
おっ、お願い…っ！！ うぐっ、うううっ！！」

今までになく強い力でぎゅっと抱き締めてくる杏子さん。それはまるで俺に助けを求めるかのよう。

※「…わかりました…っ！ じゃあ杏子っ！ もっと強くイキめっ！！ 赤ちゃんを押し出すんだっ！！」



杏子「うぐっ、うああ！！んああああああっ！！！！！！」

メリメリメリッ！！ぶしゅああああっ！！
彼女の悲鳴と共に、膣肉を引き裂き大きな赤ちゃんがついに外へ飛び出した。

※「うおおっ！！うっ、生まれたっ！生まれましたよ！杏子さんっ！！」



杏子「うぐっ、うああ！！んああああああっっっ！！！！！！」

メリメリメリッ！！ぶしゅああああっっ！！
彼女の悲鳴と共に、膣肉を引き裂き大きな赤ちゃんがついに外へ飛び出した。

※「うおおっ！！うっ、生まれたっ！生まれましたよっ！杏子さんっ！！」



杏子「はあ……っ、はあ……っ、そうが……っ♡♡良かった……っ♡お前と作って……お前と一緒に産んだ……
赤ちゃんだからな……っ♡♡」

苦痛を乗り越え、安堵の表情を見せる杏子さん。力を使い切ったのか、俺にその身を委ねぐったりとしている。そのすぐ後ろでは生まれたばかりの可愛い赤ちゃんが元気な泣き声を聞かせてくれる。

※「凄く元気な赤ちゃんが生まれましたよ…、お疲れさまです…、杏子さん…」

杏子「はあ…はあ…、すまん…お産が近いのを黙っていて…。出来れば産む前にもう一度…」

※「わかっていますよ、杏子さん…。俺も嬉しかったですから」

杏子さんの出産から遅れること2週間、ついに八千代さんにもその時がやってきた。

八千代「んあああっ！！ああああああ——っっ！！！！！！」

八千代さんの叫び声と同時に、彼女の秘裂部から赤ちゃんの頭部が顔を覗かせた。陣痛が始まってから約1時間後、予想以上に早いペースでのお産だ。かねてから覚悟していた出産の苦痛に耐えながら、必死にイキむ八千代さん。

杏子「しっかりしろ、八千代！大変なのはここからだぞっ！」



八千代「ふぐっ！！うううっ！！いっ、いたおい…っ！！あっ、あそこが裂けるっ…っ！！
はあ…っ！！はあ…っ！！」

※「頑張れっ、八千代！もっとしっかりイキむんだっ！赤ちゃんもうすぐ出てくるぞ！俺も
杏子さんもついでだからっ！」

八千代「はあっ、はあっ！うっ、うんっ！！わっ、私っ、頑張る…っ！！うあっ！！」

うんっ！！

うんっ！！

うんっ！！

八千代「んぐっ！！うっっ！！はぁっ、はぁっ！！あっ、赤ちゃあんっ！！おっ、
お願いっ！！はっ、早く出てきてええっっ！！！！」

必死にイキみ続ける八千代さん。膣穴に対してあまりに大きすぎるそれは、出口で引っかかっているようで中々外に出ようとしない。彼女がイキむ度に、秘裂からは鮮血の湿った羊水が噴出し、垂れ落ちる。



八千代「んああっ！！あああああ——つっつっ！！！！」

ぶしゅっ、ぶしゅあああっ！！！！
秘裂を引き裂き、鮮血を撒き散らしながらついに赤ちゃんが外へ飛び出した。杏子さんの
赤ちゃんと同じくらい、かなり大きな子だ。

※「やっ、やった！！生まれたぞっ、八千代っ！！赤ちゃん生まれたっ！！」



八千代「んぐっ！！うっっ！！はぁっ、はぁっ！！あっ、赤ちゃんっ！！おっ、
お願いっ！！はっ、早く出てきてええっ！！！！」

必死にイキみ続ける八千代さん。膣穴に対してあまりに大きすぎるそれは、出口で引っかかっているようで中々外に出ようとしない。彼女がイキむ度に、秘裂からは鮮血の混じった羊水が噴出し、垂れ落ちる。





八千代「はあ……っ、はあ……っ、わっ、私……っ、やったの……っ？赤ちゃん……っ、生まれてくれたあ……？」

赤ちゃん「ほぎやっ、ほぎやっ♡」

※「ああっ、この通り元気な女の子だよっ、八千代！良く頑張った！これでお前もお母さんだなっ！」

はあ……♡

はあ……♡

ぽん♡


ごっ♡

八千代「はあ…っ♡♡私…っ、嬉しい…っ♡♡※※君の赤ちゃん…っ、杏子さんと
同じ赤ちゃん産めて…っ♡♡幸せよ…っ♡♡」

※「ああ…、俺もだよ八千代。俺の赤ちゃん産んでくれて…ありがとうな…愛してる」



3年後



※「はあ〜っ、疲れた〜。ただいま〜っ！」



八千代「おかえりなさい〜っ、あなたっ♡♡」

杏子「やっと帰ってきたか。寒いのを我慢してずっと待ってたんだぞー」

仕事から帰った俺を愛する二人が、なんとまああられもない姿で出迎えてくれる。



※「わおおっ！こりゃあ一気に疲れもぶっとびそうだよ、二人とも♪」

八千代「やったあっ♡ほらほらっ、杏子さんが♡やっぱり♡喜んてくれましたよっ♡」

杏子「支部長に昇任したお前に、サービスしなくちゃって八千代がなっっ」



その後俺はさらにその働きぶりが認められ、支部長へと昇任。給与がさらに倍増した。杏子さんと八千代さんは子育てに専念するために揃って退職。それからというもの、毎日あれこれと俺の世話を焼いてくれているというわけだ。

※「いつもありがとう、杏子さん、八千代。俺、子供たちのためにも頑張るよっ！」

八千代「うふふっ♥でもねっ、※※君。お仕事もいいけど…そろそろっ♥ねっ、杏子さんっ♥」



杏子「あっ、ああ…。そうだな…。子育てもひと段落ついたし、次のをだな…♡」

ああ、なるほど。そういうわけかりこんなカソコウになったのも、その意思表示ってわけだ♪

※「わかりました…っ！それじゃあ早速、3人揃って励むとしますかっ！」

おしまい

追加エピソード
とある一夜の出来事



※「え〜っ、それでは御社の今後の発展を心から祈念して、挨拶にかえさせていただきます。皆様、本日はまことにありがとうございました」

はちばちはち…。



音尾「いや～、良かったよさっきのスピーチ。お疲れさま、※※君。君に代理を頼んで正解だったね」

※「ホント、緊張しすぎて心臓が止まるかと思いましたよ…音尾さん。あんな大勢の人の前でスピーチなんて今まで一度も経験してないし」

音尾「ふふっ、でも良い経験になったでしょ？大丈夫、ちゃんと出来ていたよ。自信持ていいさ」



※「っていうか、俺バイトなんですけど…」

音尾「はは…っ、ごめんね本当に…。本来なら、あの人がやるべき仕事のはずだったんだけど…」

※「…で、その自分の仕事を俺に押し付けた犯人はっと…。どこにもいませんね」

音尾「うん、まだ着替えてる途中なんじゃないかな」

A grand hall with a red carpet and a row of windows with red curtains. The room is brightly lit, and a potted plant is visible on the right side. The text is overlaid on a semi-transparent white box at the bottom of the image.

※「はあ〜っ、パーティーだっていうのに着替えもしてないし、スピーチは押し付けるし、本当にもう…あの人は」

回り「おおーっ！！」

急に周囲から歓声が上がった。思わずその声の方向へ向いてみると…。

杏子「…ずいぶんと待たせたな。やっと支度が終わったぞ」

※「杏子さんっ!!!」


そこに現れたのは、ドレスに着替えた杏子さんだった。

おっ!!

おっ!!

おっ!!





社員A「おいっ、あの人誰だ？モデル？女優さん？すっげー美人だぞ…！」

社員B「違う違う、うちの社員らしいぜ。ほら、あのいわくつきで言われてる〇〇支部の…」

社員A「ええーっ！じゃあ音尾さんの言ってた部下の白藤って人かー！？」

周囲に飛び交う杏子さんの美しさへの驚き、感嘆の声。ただでさえ素が素晴らしい杏子さんが、こんなビシッとしたドレスをまとえば、誰もが驚くに違いない。さっきまで不満たらたらだった俺でさえ、思わず見とれてしまう程だ。

※「待ちくたびれましたよ、杏子さん。…でも、その甲斐がありました」

杏子「私はこんな窮屈でヒラヒラしたのは邪魔だから嫌だって言ったんだがな…着付け係がいうものだから」




※「でも、凄く良く似合ってますよ、杏子さん。とっても綺麗です」

杏子「んっつ、そうか」

そういつつ、俺はそつと杏子さんの腰に手を回し、引き寄せた。



A grand, brightly lit hall with a polished wooden floor and a red carpet. The walls are white with gold trim. Several tall windows are covered with red curtains with gold-colored valances. In the distance, a man and a woman are standing near one of the windows. A potted plant is visible on the right side of the room.

社員A「あーっ！あのデカイ男、腰に手を回したりなんかして…！ひょっとしてあの二人付き合ってるのか!？」

社員B「くっそー、あんな美人を…っ！！羨ましいー…っ！！」

さっきまで上がっていた感嘆の声が、一気に羨望と嫉妬の声に変わる。ふふっ、どうだ羨ましいだろ。俺はこのおっばいと毎晩好きなだけやりまくってるんだぜ〜。

などと、ほんのちよっぴり優越感に浸れたのも一瞬だった。



音尾「あ〜っ、白藤さん、※※君。こちら、△△支部マネージャーの川崎さん」

※「えっ、ああっ！！どっ、どうも初めましてこんばんは！杏子さんもほら、挨拶しなきゃ…」

杏子「ばくばくっ、もぐもぐっ、んっ、これ美味しいな」



課長「はっはっは！君若いのにしっかりしてるじゃないか！どうだ、バイトじゃなくて正社員にならんか？」

※「ええっ！そっ、それはありがとうございます…、でもまだ…、って杏子さんっ！！ドレス汚してますっは！
ああっ、こんなにこぼして…！すいませんすいません」


杏子「あのさー、これおわかりまだある？」



杏子「それ食わないなら私がもらうぞー、あーん」

※「杏子さん、おかわりもらってきましたよーっつて！！あーっつ、他人の料理に手をつけないでくださいよーっつ！！
俺が恥ずかしいからやめてーっつ！！」

杏子「ばくばく、もぐもぐ」



回り「あ…っ、この人駄目な人だ……。可哀想に…あいつ、ただのお守りじゃん……）」

と、いつの間にか周囲からは同情の視線で見られていたのだった…。

ホテル



※「ほらっ、杏子さん部屋に着きましたよ…っ！！よいしょっ、ちゃんと立ってください…っ！」

杏子「う～～ん…」

やっとの思いで杏子さんを部屋に運んだ。相当食べた上に、お酒まで飲んだようで、すっかり酔いつぶれてしまっている。



※「杏子さん、このまま寝ちゃ駄目ですよ！ドレスは借り物なんだから…、聞こえてます？杏子さんってば！」

杏子「んん……、ん~~~~っ」

※「んむ…っ！！んん…っ！ははあっ！！きよ、杏子さん…っ！？」

突然抱きついてきたかと思うと、不意の接吻。普段の彼女らしからぬ行動に驚く俺。ひよっとして、お酒飲んで酔ってしまっているのか…？

杏子「ふふ……っ、ふふふ……っ、※※~~~~っ♡♡♡」



杏子「んんっ、なんだあコレは…っ♡♡ガッチガチじゃないか…っ、ああ？♡♡
私を介抱するフリをしてえ…、ナニするつもりだったんだあ…？♡」

※「ちよっ、杏子さん…っ！ やっ、やっぱり酔ってますね…っ！！」

杏子「はあ……っ、しょうがないなあ…♡♡ゴク…っ♡♡今回だけだぞお…♡♡」



杏子「ちゅぽっ♡ちゅるっ、ちゅちゅっ♡♡ちゅぞっ、ちゅちゅっ♡♡♡」

勢い良く肉棒を咥え込んだかと思うと、いきなりの全力バキューム&ストロークのフェラ。まるで腹を空かした獣が餌にくらいつくかのような、そんな食べるような吸引。

※「うおおおっ!!! うああっ、はあっ、はあっ!!!」

おっ！

おっ！

おっ！

おっ！

おっ！

杏子「んんっ♡♡ちゅるっ、ちゅぞぞっ♡♡ちゅっ、ちゅっ、んぐっ♡♡」

※「きよっ、杏子さ…っ！！んぐっ、うああっ！！」

やばい、こんながっつくようなフェラされたらやばい…っ！！すぐ射精しちゃうっ！！



そういえば、杏子さんが以前言っていた事がある。「酒は飲めるが自重している、飲むと収まらなくなるからな…欲求が」と。

※「まっ、まさか…っ！食欲だけじゃなくて…せっ、性欲も……っ！！」

ちゅるるっ!

ちゅるるっ!

ちゅるるっ!

※「あっ!! だっ、駄目です杏子さんっ!! このまま射精しますっ!! うっ!!」

杏子「いいひよっ♥♥射精ふえっ♥♥いっぱいっ♥♥とひきりっ、濃いのっ♥♥飲まへろっ♥♥
ちゅちゅっ、ちゅるるっ♥♥♥♥」



※「射精るうっつ!! うあああっつ!!!!」

思わず杏子さんの頭を掴み、喉奥に向かって一気に精液を解き放った。熱いほとばしりが次々と発射され、彼女の口内に流し込まれていく。

杏子「んぶっっっ♥♥♥んんっっっ♥♥♥♥♥♥♥♥」



杏子「ぶはあ……はあ…っ、ごっくん……っ♡♡♡あぁ……濃い…っ♡♡喉奥でからみついて…っ、
引っかかっているみたいだぞ…っ♡♡」

精液をゴクリと喉を鳴らして飲み下し、満足げな笑みを浮かべる杏子さん。

※「はあ…っ、はあ…っ、はあ……っ！！！！」

杏子「んおおおっ♡♡♡んぎっ、んいっ♡あっ、あっ、あーっ♡♡♡」

※「ははっ、まるでケモノみたいな凄い喘ぎ声ですねっ！杏子さんっ！！そんなにここを突かれるのがいいんですかっ！！」



ずちゅっ!ずんっ!ぐちゅっ!
杏子さんの足を掴み、乱暴に叩きつけるように肉棒を膣内へ突き込む。中はもうびしょびしょの濡れ雑巾みたいにぬかるんでいて、ヌルヌルだ。

杏子「んぐっ、んんううっ♡♡あひっ、んいっ♡チンポくるううっ♡♡♡」



※「あんながつつくような本気フェラされたら…っ、こっちだって火がつきますよっ！杏子さんっ！今夜はもう寝かせませんからねっ！何回でも何十回でも！！」

杏子「んひっ♡んあぁっ♡あぐっ♡んんうっっ♡あっ、あっ、あ————っっ♡♡♡」

内臓まで突き破られるかのような強烈なピストンに、もはや杏子さんはされるがままで。



杏子「んぎっ♡♡いぐっ♡♡もっ、もお…っ♡いぐっ、いぐうううっ♡♡♡」

※「はぁっ、はぁっ、はぁっ！！もう少し我慢してくださいよっ！イク時は絶対一緒だからなっ！
わかったなっ、杏子！！もう射精すぞっ！！おらっ、おらっ！！」

杏子「あっ、あっ、あ…っ♡♡♡いぐいぐっ、いぐううううっ♡♡♡♡」



※「ああっ！！射精るっ！！うぐっ！！！！きよっ、杏子おおおっっっ！！！！」

どくんっっ！！どびゅびゅっ！！びゅるるううっ！！
熱い塊が勢い良く飛び出し、膣奥に直撃する。その瞬間、杏子さんも絶頂に達した。

杏子「わわわわわわわわわわ————♡♡♡♡♡♡♡♡」





杏子「はあ…っ、はあ…っ、んはあ……っ♡♡♡膣内…っ、熱い…っ♡♡♡」

※「ふふっ、どうですか杏子さん…俺の精液っ、たっぷり膣内に射精したの…わかりますか？」

杏子「んあ……っ♡♡はあ……っ♡♡♡」



はあ…っ♡♡♡

※「さあで、杏子さんも少し落ち着いたところで…いつもの使わせてもらいますか♪」

杏子「んん…っ、なんだ……？ あっ…♡♡」

杏子「んん…っ、なんだと思えばやっぱり…っ、これが…っ♡♡相変わらずだな…っ♡♡
んん…っ、んん…っ♡♡」

※「やっぱりこれをしておかないとね…っ♪俺のチンポが満足してくれないんですよ…っ！
ああ…っ！この柔らかさよ…っ！」



ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！

両手でがっちりと杏子さんのおっぱいを掴み、腰を叩きつける。柔らかく張りのあるおっぱいは、ぎゅっと指に力を入れるとつぶつぶとその柔肉に指が沈み込んでいってしまう。

※「会場でもっ、どれだけ大勢の男達に視姦されると…っ、思ってるんですか？杏子さんはもっど自覚した方が…っ、いいですよ…っ！こんなエロおっぱいぶら下げてるって事をっ！」



杏子「んんっ、お前らがスケベな…だけ、だるっ♡♡んふっ♡ふふっ、チンポ
が凄く熱くなってる…ぞっ♡気持ちいいのが…っ？♡♡」

※「もちるんっ！こんなおっぱいで扱わせてもらって…っ、気持ちよくなるわけが…っ、
ないですよ…っ！世界で俺だけの…っ！ハイスリ専用おっぱいですから…っ！」



杏子「ああ…っ、そうだ…っ♡♡私の身体はお前の…お前のものだからな…っ♡♡
遠慮せず好きに使え…っ♡♡んん…っ♡♡」

※「はあ…っ、はあ…っ！それじゃあ遠慮なく…っ、このままイキますよ…っ！！精液っ、
思いっきりぶっかけますよ…っ！！」

杏子「ああ…っ、来い…っ♡♡好きなだけ…っ、ぶちまける…っ♡♡」



※「あぁ、あっ！！！！イクっ！！うっっ！！射精るっっ！！！！」

どっっ！！びゅびゅびゅっ！！びゅるるるっっ！！！！
次の瞬間、亀頭の先端から勢いよく飛び出した精液が杏子さんの顔目掛けて次々に降り注がれていく。

杏子「んん……っ♡♡熱いのが……っ♡♡♡んあ……っ♡♡♡」



※「はあ…っ、はあ…っ、杏子さんのおっぱいマンヨ…たっぷり使わせて頂きましたよ…っ！」

杏子「ん…っ、ふふ…っ♡どうやら…満足だったみたいだな…っ♡♡んあ…っ、この鼻をつくような刺激臭…っ♡♡こっちも相変わらずだ…っ♡♡」

べっとりついた俺の精液の臭いをかいで、うっとりとした表情を浮かべる杏子さんだった。



翌朝

※「……んあっ、なんだ…？この包まれるような柔らかい感触…はっ、うおお…っっ！？」

杏子「ん…っ、やっと目が覚めたか」



※「な…っ！？うおおっ！！うああっ！！！！」

ひゅるるっ！！ひゅひゅうっ！！
柔らかいおっぱいに挟まれたまま、精液を勢いよく宙に巻き上げる肉棒。

杏子「んん…っ♡♡ついに射精したか…っ♡♡ふふっ、寝起きだっというのに
全くコイツは…♡♡」

※「はあ…、はあ…、いきなりでびっくりしましたよ。杏子さん」

杏子「お前がいつまで経っても起きそうにないからな、サービスしてやったんだ。感謝しろよ。それにしても…相変わらず朝からとんでもない量だな…♡」





そっだ、思い出した。俺は昨日、酔った杏子さんとホテルに泊まったんだ。疲れ果てるまでHに夢中になってたから…気がついたらそのまま寝てしまってたらしい。

杏子「…まあ私も目が覚めたのはついさっきなんだがな。ん…っ、なんか頭痛くて…昨日の事はよく覚えていないんだ」

※「きっと三日酔いですね。杏子さん昨日お酒飲んで酔ってましたから」



杏子「やはりか…、飲まないように気をつけているつもりだったんだがな。お前、昨日ここで私に何を…と、まあ聞かなくてもわかるか。こんな状況なら」

脱ぎっぱなしで散乱している衣服。全裸でベッドに寝ている二人。昨日何があったかなんてわざわざ説明する必要も無い。

※「昨日は楽しませてもらいました。ありがとうございます、杏子さん」



杏子「ふ…っ、じゃあこれは貸しにしておくからな♡…さてと、そろそろ着替えないとチェックアウトまで
もう時間がないぞ。いつまでそんなままのままだいるつもりだ」

※「ああ、そっ、そうでした！ えとっ、服はっど…」



杏子「私の下着…、またドロドロになってるじゃないか。これじゃあ着けられないな…。ん？なんだこの紙切れは…。パーティーのくじ引き？全然覚えがないぞ」

ゴクツ…。杏子さんが動くたびにぶるんぶるんと弾むおっぱい。フリツとしたお尻。朝から眺めるにはあまりに刺激的な光景だ。

杏子「あ～、ドレスもだ…。全く、どうするんだ？このままじゃ私が帰れないぞ…おい、聞いているのか？」

※「…ええ、本当にすみません。では今日は欠勤ということで。はい、…そのシフトなら大丈夫です」

杏子「んひっ♡んあっ♡あぐっ♡♡んおおっ♡♡♡」

※「すみませんね、杏子さん二日酔いみたいでっ♪そうなんですよ、俺も昨日からずっと『突き』合っでて…っ少はいっ、はいっ」

杏子「ちっ、違…っ♡♡んあっ♡♡♡」



※「…さあ、これで今日一日ずっと楽しめますよ♪仕事サボった分、二人でたっぷりオマンコ
しましょうねっ、杏子さんっ♪」

杏子「あっ、あっ、あっ、あ————っっっ♡♡♡♡」

結局その後俺達は一日中飽きることなくセックスを堪能し、翌日昼遅くによろやくホテルを後に
したのだった。さすがの俺も、今回はかりは腰がヤバかった…。



■登場人物紹介その1

●白藤杏子 28歳

ファミレス『ワグナリア』の店長であり責任者だが、仕事が全く出来ない駄目な人。食べることが大好き。前作で食事の提供を条件に主人公と肉体関係を持つが、やがて恋愛関係に発展し最終的にお互いの気持ちを確認して相思相愛の仲となる。

いかんせん人付き合いが下手で、さらには本人も筋金入りの不器用なため、時折誤解を招くが実際には彼女なりにきちんと回りを思いやっている。

恋愛知識も相変わらず疎く、性交渉をコミュニケーションの一環程度にしか認識していないため、今回の騒動を招く原因となった(彼女の的には主人公と八千代が仲良くなって欲しいという配慮らしい)。

モデル顔負けのボディと店内No1の爆乳の持ち主。主人公の求めにはいつでも応じ、また性交渉を重ねた結果身体もすっかり開発され、どこでも感じる素晴らしいエロボディとなっている。

身長:164cm

体重:55kg

スリーサイズ:103(Kcup):57:91



■登場人物紹介その2

●轟八千代 20歳

ファミレス『ワグナリア』のフロアチーフ。気品がありとても優しい性格の女性で、どんな時でも常に笑顔が欠かさない。スタイルもよくナイスバディの美人だが、少々天然。なぜか真剣の日本刀を帯刀している。店長である杏子を小学生の時から慕っており、いつもくっついてる。

杏子の勘違いから、主人公のお世話をする事になり、その結果肉体関係を持つに至る。前作の杏子と同じく最初は恋愛感情を認識していなかったが、徐々に意識するようになり、職場復帰した杏子と主人公の情事を目撃し、初めて自覚される。

杏子と生活を共にした時間が長いためか、色々と彼女の影響を受けており一般知識など色々と共通する部分も多い。また、杏子に対しては恋愛感情と見紛う程の強い想いを抱いているが、同性愛者というわけではなく単に憧れの感情からである。

また、付き合いが付き合いなだけに同い年の友達がおらず、特に男性とは付き合うどころか友達もいなかった。

身長:157cm
体重:49kg
スリーサイズ:89(I):55:86



■登場人物紹介その3

●種島ぽぷら ■歳

ファミレス『ワグナリア』のフロア担当のちっちゃな女の子。明るく優しい良い子で、仕事も出来、回りからの信頼も厚い。

小学生と間違われるほど背が低く、本人のコンプレックスになっており、身長の話になるとすぐムキになったりする。その反面、大変豊満な胸の持ち主でもある(店内No.3)。

今作では出番ないよ！『さむわんわん！アンコール♪』の方を期待してね！

身長:136cm

体重:29.4kg

スリーサイズ:91(J):49:75



■登場人物紹介その4

●山田葵(自称 〇〇歳)

名前、経歴、年齢の全てがうさんくさい謎の家出少女。そのため、『ワグナリア』に組み込みで働く事に。普段使われていない店の屋根裏を部屋に使い、生活している。

仕事が出来ず、物事をややこしくするのが得意なトラブルメーカー。しかし、決して悪意があるわけではなく性根は極めて純真でお年頃の少女である。ほぶらに次いでちっちゃいが、意外にも出るところはしっかり出た自称『ナイスバデー』の持ち主。

彼女もほぼ出番なし。『さむわんわん！アンコール♪』の方で(以下略)

身長:144cm

体重:35kg

スリーサイズ:73(Ccup):52:74



■登場人物紹介その5

●伊波まひる ■歳

ファミレス『ワグナリア』の従業員の一人で、ウェイトレスをやっている女の子。家庭の事情により極度の男性恐怖症のため、男が近づくと無条件に殴り飛ばす癖がある。とても暴力的に見えるが、本当はとても優しい、思いやりのある女の子。殴らない伊波ちゃん可愛すぎてやはい、ホントやはい。

凄く美人なママさんとイケボで畜生なパパがいるらしいぞ！

身長:156cm

体重:43kg

スリーサイズ:71(AAA):54:87



■登場人物紹介その6

●主人公(作中表記『※※』) 20歳

ファミレス『ワグナリア』のコックとして働くバイトマン。主人公でいわゆる竿役。前作で紆余曲折あって店長の杏子と相思相愛の仲となる。そのため彼女に対する想いは非常に強い。

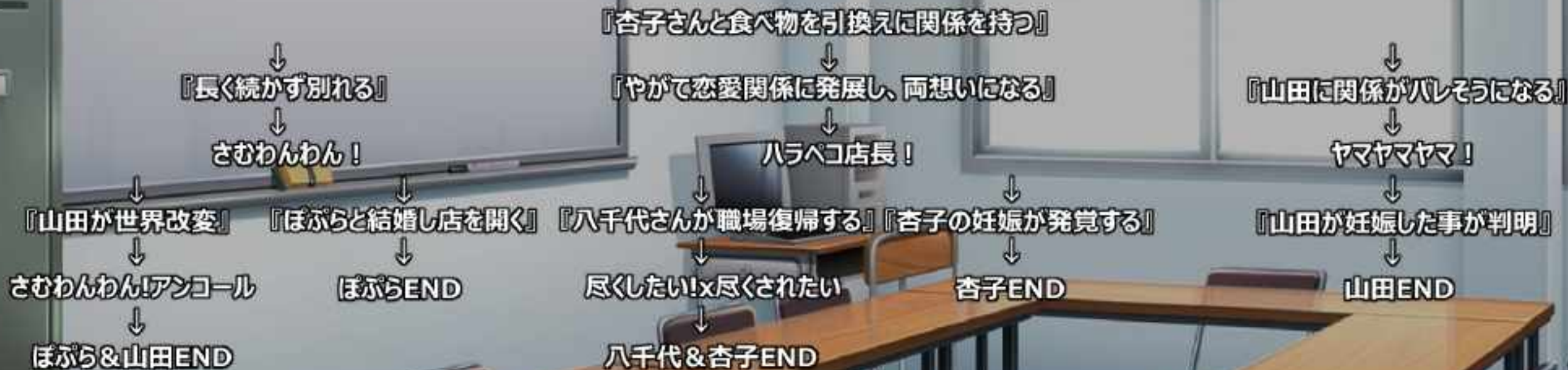
八千代と肉体関係を持ってからも、杏子に対する想いから彼女に複雑な心境を抱いたまま関係を続ける。しかし、杏子本人から背中を押され、はっきりと自分の気持ちを八千代に伝え、晴れて両想いとなった。その結果3人両想いという不思議な関係が誕生。杏子に尽くしつつ、八千代に尽くされるという羨まけしからん状態になる。

筋肉トレーニングで身体を鍛えてあり、高身長な杏子であっても軽々と担げるほど筋肉モリモリ。性器のデカさも半端なく、持続力、射精量も抜群。さらには大きさの大小を問わず、おっぱいが大好きなおっぱい星人。

身長:191cm
体重:93kg



作品関係図&分岐ルート





■ファミレス制服

●ワグナリアのお馴染みの制服。スタイル抜群の八千代だけに、可愛い制服と相まって美しさがさらに際立つ。さらに、気立ての良い彼女の丁寧な接客もあって、来客からの評判は上々である。…帯刀を除いては、だが。

ちなみに刀の差し方が反対(本来なら反りが上になる)だが、おそらくはよく知らないのだろう。



■ファミレス制服(妊娠/臨月)

○妊娠し、臨月期を迎えた状態。本来なら産休を取るべき時期なのだが、会社の方針により本人の意思次第で勤務が可能。


少子化と女性の社会進出の課題を兼ねた、日本社会で働く女性の未来の姿として高評価されている。(日本初の女性首相候補と目されている、とある大物政治家が裏で絡んでいるという噂もある)。



■コスプレ制服

○とある常連客によって、半ば無理矢理着る事になったコスプレ制服。胸元が大胆に開いた
実はセクシーなデザインとなっている。本人も当初は困惑していたが、案外気に入ったようで
主人公に嬉しそうに見せびらかしていた。

本来ならしっぽもあるはずだが、実は描き忘れていた(後になって気付きました)。



身長:157cm
体重:49kg
スリーサイズ:89(I):55:86

■ 裸

●きゅっと引き締まった腰のくびれに、ツンと乳首の上向いたおっきなおっぱいと、実にスタイル抜群のヒロボディ。20歳という、若さはちぎれる正に食べ頃な年齢とあって、色々な点で杏子さんとはまた違った味わいが楽しめる。


特にアソコの締め具合は絶品で、かつ膣高も浅めなため、非常に感じ易い身体になっている。

身長:157cm
体重:70kg
スリーサイズ:94(J):107:91

■ 裸(妊娠/臨月)

●妊娠し、臨月期を迎えた状態。特に問題もなく、母子共に健康ですくすくと育っている。同時期に妊娠した杏子のと比べると、八千代のお腹は丸く大きい卵型といったところか。

体重増加は21kgとかなり大きめだが、胎児の大きさ(推定3400g)も影響しているようだ。



身長:157cm
体重:70kg
スリーサイズ:94(J):107:91

■ 裸(妊娠/臨月)

●妊娠中の性行為は、6ヶ月に入った頃から再開しており、杏子と入れ替わりで毎晩励んでいる。性感は妊娠前よりもさらに強くなり、行為中に何度も絶頂することも珍しくない。

さらに大きくなったおっぱいは、以前よりずっしりと重みを増し、授乳に備えて既に乳腺の活動も始まっているようだ。



■ 裸(おっぱい大/没差分)

● 第一子出産から数年後の八千代。授乳期間を経てさらに乳房が大きくなり、かつての杏子に匹敵する程に成長した。

…という設定もありだったかもしれない、没差分です。最初に描いた時はこのサイズでしたが、これだと杏子とカブってしまうので、止む無くサイズを小さくしました。



□ 店長制服

●杏子の勤務時の制服。他の従業員とは異なる、OLスーツのような意匠のデザインが特徴的。たださえスタイルの良い彼女の魅力をさらに引き立てており、セクシーなタイトスカートからすらりと伸びる生足が実にたまらない。

実際、この容姿なので異性にはかなりモテるようなのだが、八千代によって相当数が排除されてしまっている。



■ 店長制服(妊娠/臨月)

●妊娠し、臨月期に入った頃の杏子。八千代の項でも書いた会社の方針によって勤務している。しかし、本人の健康に問題はないものの、お腹の大きさが相当なものとなり、とても不恰好な姿になってしまっている(本人曰く、どうせ表に出ないから問題ないとの事)。

ちなみにお腹に付けている赤ちゃんバッジは、会社から支給されたもので着用が義務付けられている。




身長:164cm
体重:55kg
スリーサイズ:103(Kcup):57:91

■裸

●全裸の杏子。もはや語るまでも無い、この完璧なエロボディこそがこの一連の物語の主役であり、主人公や八千代を虜にした元凶である。

彼女最大の武器であるそのおっぱいは、今までに数え切れないほど揉まれしゃぶられ挟んできた必殺兵器。感度も大変良く、全てにおいてまさに至高のおっぱいといえる。




身長:164cm
体重:82kg
スリーサイズ:109(Lcup):114:97

■裸(妊娠/臨月)

●妊娠し、臨月状態の杏子。八千代と同時期に主人公に種付けされ、懐妊した。彼女の摂取カロリーも影響してかぐんぐんお腹も大きく育ち、相当な体重増加(27kg)に繋がった。胎児の推定体重も約3800gとかなり大きい。

八千代と比較して、杏子のお腹は大きく前に突き出た形のポテ腹となっており、ヘソの盛り上がりも凄い。



身長:164cm
体重:82kg
スリーサイズ:109(Lcup):114:97

■裸(妊娠/臨月)

●杏子が出産した当日は、実は旅館に到着した頃から既に陣痛が始まっており、じんわりとした弱い痛みが続いていた(彼女がそれを陣痛とはっきり自覚したのは夜中であつたが)。主人公との直前の性交渉が出産を促進させた要因にはなっているかもしれない。

先に寝ていた八千代は、杏子の出産に気付かず、翌朝になって気付き大騒ぎになった事は言うまでもない。



■裸

●二人とも豊満なバストの持ち主だが、こうして並んでみると明らかな違いが見られる。八千代のおっばいはツンと上向きの釣り鐘型で、乳首や乳輪が大きめ。杏子は前にスンと突き出たロケット型である。

二人とも、その絶妙な張りと柔らかさにより、大きさにも関わらず美しい形を見事に維持している。



■ 裸(妊娠/臨月)

● 妊娠した二人の姿。こうやって見ても杏子の方が一回りほど大きい。二人の合計増加体重は48kgと、成人女性一人分の重さである。かといえど、余計な肉もつかずその美しいスタイルを無事に維持できている。

主人公がポテ腹フェチということもあって、毎晩のように3人仲良く励んでいるようだ。



■裸(妊娠/臨月)

●当初の予定では、杏子の方は双子妊娠とする設定であった。…が、諸事情により変更となった。
脚本が二転三転した事が主な原因である。

ラフ画時点では存在した母乳絞りシーンやWポテ腹ズリも同じような理由で没になってしまったのが残念。
期待された方には本当に申し訳ない。